No.7911

財団法人新住宅普及会
住宅建築研究所報1980

漁村住宅の空間構成と更新過程に関する研究

小泉正太郎
宮崎隆昌
三国政勝
斉藤輝二

目　次

はじめに
1.　研究目的と方法
　1－1　研究目的
　1－2　研究方法
2.　京都府伊根漁業集落
　2－1　調査地及び調査対象
　2－2　住空間構成
　2－3　住生活様式
　2－4　住宅の変化過程
3.　三重県相賀浦漁業集落
　3－1　調査地及び調査対象
　3－2　住空間構成
　3－3　住生活様式
　3－4　住宅の変化過程
4.　千葉県勝山漁業集落
　4－1　調査地及び調査対象
　4－2　住空間構成
　4－3　住生活様式
　4－4　住宅の変化過程
5.　まとめ

はじめに

四周を海に囲まれたわが国には第5次漁業センサスによると2,194の漁業集落があり，居住人口は約3,381万人，総世帯数1,124万世帯に達する。これらのうち，都市に該当する集落を除くと，いわゆる漁村といわれる集落は1,837，居住人口約942万人，世帯数約240万世帯である。これら漁村と呼ばれる地域は人類発生以来人々が居住して来ており，今日でも漁業生産に従事しわが国のたんぱく質食料供給の担い手として社会的に重要な位置をしめている。漁村住宅及び漁村の住様式は一般的には伝統的，閉鎖的であり，また密住であり都市的様相を有しているといわれている。しかし，これらの実態についてはほとんど明らかにされていない。

漁村住宅の調査研究は，戦前は住宅同潤会及び東北更新会の共同調査により「東北地方漁村住宅改善」として行われ，その後は昭和30年に京都大学西山卯三グループによる「熊野灘農山漁村住宅調査」及び「鳥取県農山漁村住宅調査」，同年農村建築研究会東京学生グループによる「天津小湊漁村住宅調査」，昭和33年京大西山研究室絹谷，湯川等の「北海道における漁村住宅の供給計画」のための調査研究等ほんの小数の研究しかなされておらず，解明されたことは，①漁村住宅の階層性の存在と隷属層の問題点，②事例的には住宅規模，間取り，各室の使われ方，上下水設備等の実態と規則性及び矛盾等が明らかにされた。そして，漁村住宅の本質的面の解明がなされないまま住宅改善方法や住宅計画が提案された。その後昭和48年以後千葉大小泉研究室や芝浦工大畑研究室の調査研究が行われるまでは15年間の空白の時代であった。

漁村は漁業を生業とする漁民の居住する地であり，「漁業の論理」にもとづいた住空間及び住様式が解明されなければならない。漁業の論理とは水界で主生産を行い陸界で居住する，また，わが国特有の占有漁場である地先漁場に規定された沿岸域に，その生産様式に規定されて種々の生活構造を有する規定関係と矛盾の関係である。これら漁業の論理にもとづいた漁村住宅は漁村の形態が多様であるようにはたして多様であるのか，それとも一定の規則性を含めているのかを明らかにする必要がある。漁村住宅の改善や供給計画を行うためにも多くのことを歴史的変化過程をふまえつつ明らかにする必要があろう。

1.　研究目的と方法

1－1　研究目的

"はじめに"にも述べたように，我が国の漁業は，それ自身のためとともに食料供給の担い手として全国的見地から古くより重要な役割を占めてきた。このような営のある漁村と呼ばれる集落には950万近くの人々が居住をしている。しかし，今日まで漁村住宅に関する改善や更新に対する施策や研究はあまり行われておらず，漁村住宅の建築及び設計計画は漁業者自身の慣習や地元の大工にゆだねられており，一部住宅金融公庫や生活改良普及員を通じて僅かに住宅計画や住宅改善が行われてきた現況にある。漁村住宅の特性はどのようなものか，どんな形態になっているのか，漁業を営む中での居住の仕方（住様式）はどんなものでどんな住宅形式を生み出している

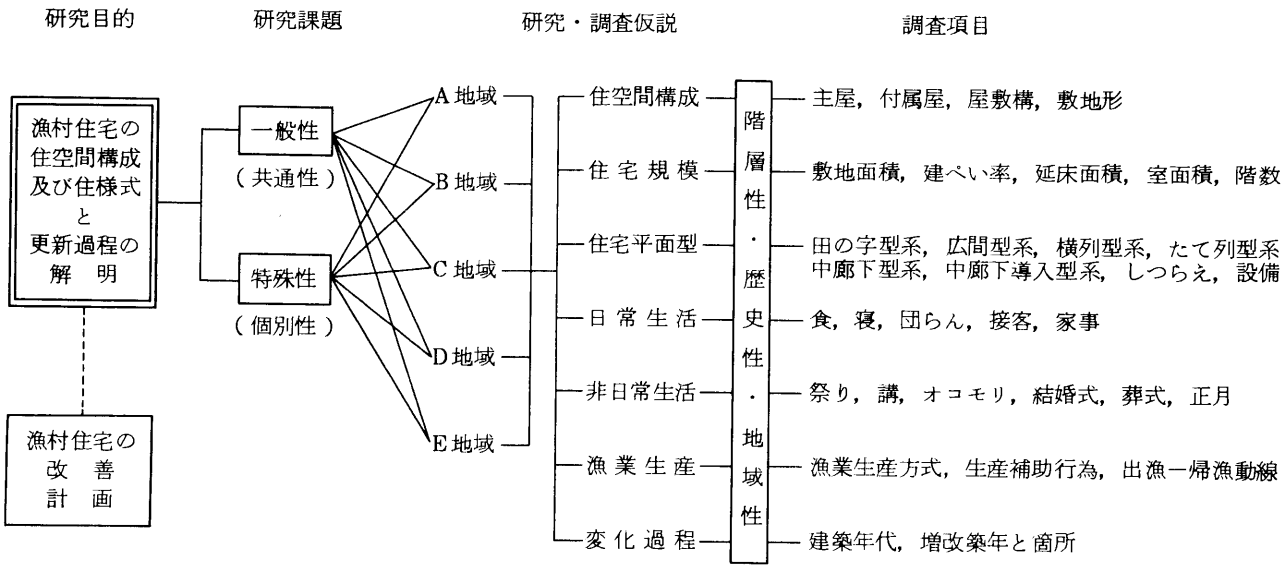


図１－１　研究方法のフロー

のか，また，都市化，近代化の波の中でどのように変化しつつあるのか，全国的に一様なのか多様なのか，これらの解明がいまだなされていない状況である。

本研究は近年の都市化，過疎化がもたらす漁業構造の変化の中で，漁村住宅の空間構成（住宅形式，屋敷内構成，間取り構成）と住様式の現状及び更新過程を知り，漁村住宅の一般性と特殊性を解明すること，これらにより漁村住宅の改善の方向性と供給における建築計画的在り方を探ることを目的としている。このために以下の諸点が研究課題として設定できる。

① 漁村住宅の規模，空間構成及び住様式は，漁業構造，集落構造の相違によりどの様に共通性があり，どの様な特殊性が含まれているのか。

② 漁村住宅の空間機能として，日常性と非日常性がある。日常性としては家族生活的側面と生産的側面があり，非日常性としては地域社会行事（祭り，講，オコモリ）がある。これらの行為より漁村の住様式を把握し，それらが住宅の空間構成とどう関係しているのかを解明する。それらが地域を超えて共通性があるのか，又特殊性とは何かを解明する。

③ 住宅の空間構成の変化とその要因をそれぞれの集落ごとに解明し，それらが漁業構造や集落構造の相違によりどのような共通性をもち，違う面を有しているかを求める。

また，本研究は２年間の継続研究の初年度として，全国より典型的な３地区を抽出し調査を行った。

１－２　研究方法

研究方法は比較法により行う。すなわち日本の典型的漁業集落を抽出し，調査仮説にもとづき調査を行い，各々の集落について整理を行い，比較検討を行い，共通性と個別性を検討し，漁村住宅の空構構成と住様式及び更新過程の一般性と特殊性を解明する。これらにもとづき，漁村住宅の改善と供給における計画方法についての理論的検討を行う。このために以下の手順に従い，図１－１調査研究のフローに示すとおりである。すなわち，

研究方法と手順

① 漁村住宅研究の到達点と課題の明確化

② これまでの漁村住宅の調査研究より，漁村住宅の一般性と特殊性及び変化過程の仮説設定

③ 漁村住宅の調査方法の検討

④ 漁村の類型化と調査集落抽出

⑤ 実態調査，調査仮説より，1.住空間構成，2.住宅規

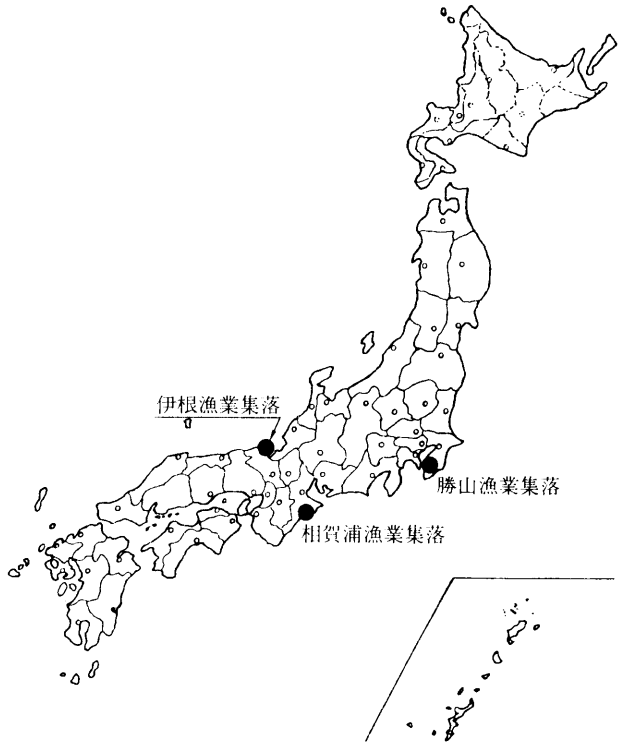


図１－２　調査集落位置図

模，3.住宅平面型（間取り），4.住空間の日常的使われ方，5.住空間の非日常的使われ方，6.住空間の漁業生産的使われ方，7.住空間及び住生活の変化過程，これらは階層性，・地域性，・歴史性の観点よりどのような共通性と個別性があるのかを調査する。

⑥　本年度は典型的漁業集落として丹後半島伊根町漁業集落，紀伊半島南勢町漁業集落，房総半島鋸南町漁業集落を選び調査を行う。

⑦　漁村住宅の空間構成と住様式及び更新過程の一般性と特殊性の解明のために，本年度は調査集落住宅の共通性と個別性を明らかにする。それにもとづき，次年度にさらに調査事例を増し，一般性と特殊性を明らかにする。

2.　伊根漁業集落

京都府与謝郡伊根町の伊根，新井崎，蒲入の3漁業集落の調査を行った。本稿においては伊根漁業集落のみを対象として以下に研究概要を述べる。

2－1　調査地及び調査対象

伊根町は京都府北部，丹後半島の先端東経135度17分，

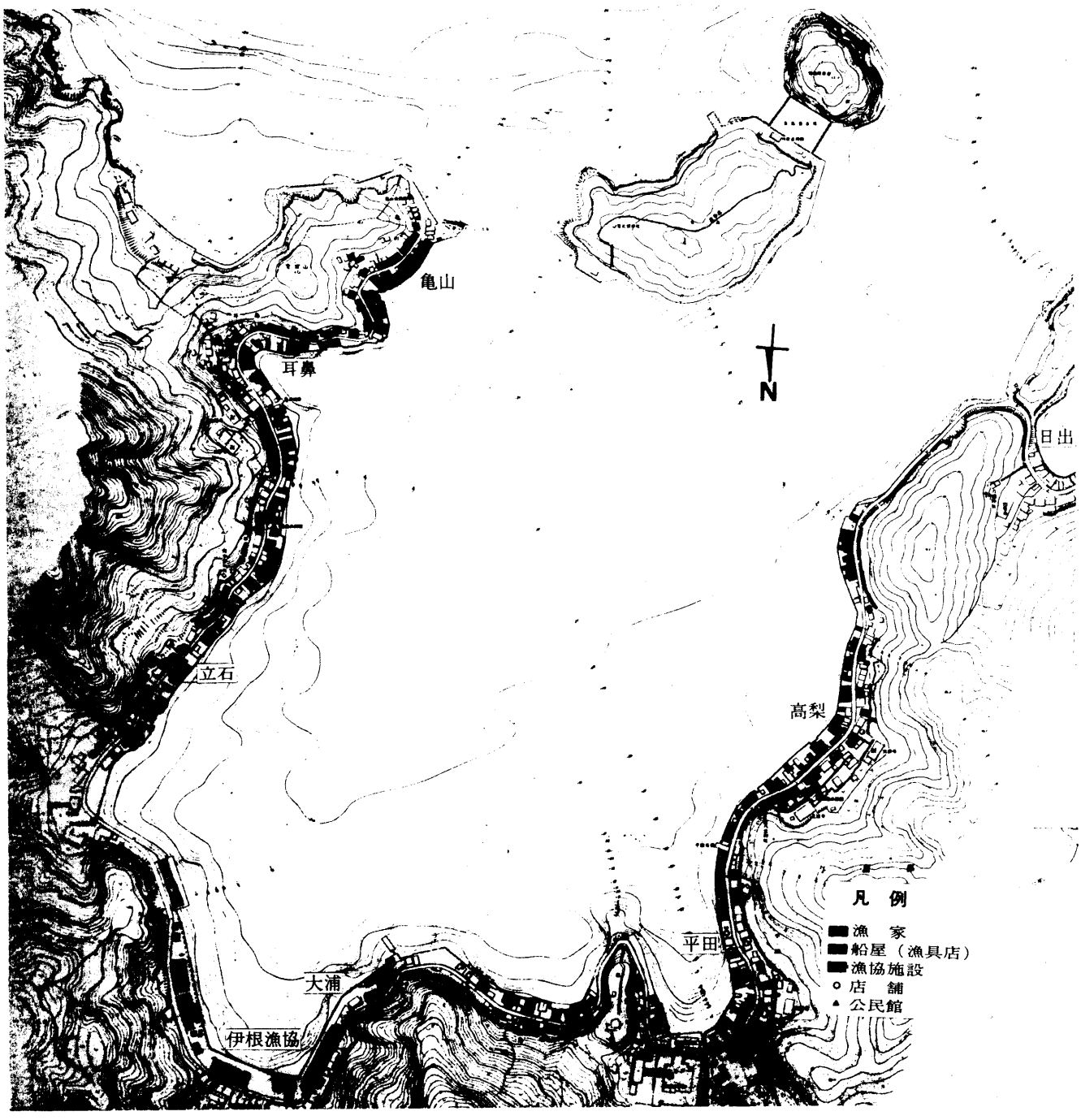


図2－1　伊根集落平面図

表２－１　第１次調査対象

項目＼地域	伊根町	調査対象漁業集落		
		伊根	新井崎	蒲入
人口	4,426	1,654	203	310
世帯数	1,115	378	51	66
漁業経営体数	155	82	18	40
漁業従事世帯数	181	120	22	10
漁家率	30.1	53.4	58.8	75.8
漁業集落数	5＋1（内陸）	1	1	1
地区数	35	8	1	1
地区平均世帯数	32	48	51	66
組数	181	50	9	8
組平均世帯数	6.2	7.6	5.8	8.2
旧自治体名	4町村の合併	旧伊根町	旧朝妻村	旧本庄村
漁港規模	第2種2，第1種3	第2種	第1種	第2種
漁業特性	京都府一の漁獲高	総合漁業	組合定置網	組合巻網船団
調査漁家数	82	60	22	20
抽出率(%)	7.4	10.6	43.1	30.3
漁家抽出率(%)	2.4	20	55	40

表２－２　第２次調査対象

項目＼地域	伊根町	調査対象漁業集落		
		伊根	新井崎	蒲入
人口	4,426	1,654 (1,415)	203	310
世帯数	1,115	378 (320)	51	66
調査世帯数	177	89	36	52
抽出率	15.9	23.5 (27.8)	71	79
調査漁家数	119	51	28	40
漁家抽出率	50.4	25.2	70	80
非漁家調査数	58	38	8	12
非漁家抽出率	7.4	21.6	73	75

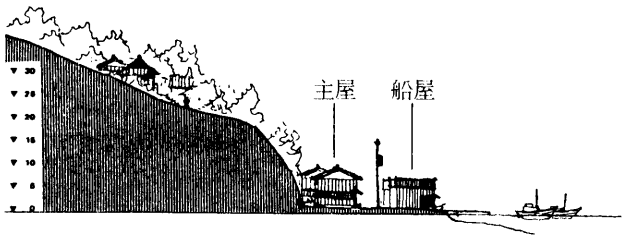


図２－２　伊根集落断面

北緯34度40分に位置し，東は日本海（若狭湾）に面し，南部は宮津市西部及び北部は弥生町，丹後町に接し，碇峠，太鼓山等の山々に囲まれている。町の面積は62.12 km²，76％が山林で耕地率は8.3％，宅地率0.7％，海岸部を除き山村である。地形は標高400m以上の山々が連なり，急峻の山岳地をなし，その崖下に漁村が点在している。気候は山陸特有の裏日本型気候で冬季多雪，秋季は「うらにし時雨」により快晴の日は少なく，四季を通じて雨が多い。伊根町は旧伊根村，旧朝妻村，旧本庄村，旧筒川村の４村の合併により昭和29年に誕生した。

伊根集落は人口1,654人，世帯数378世帯で，明治22年の合併までは平田村，亀島村，日出村の３村に分れていた。伊根集落は伊根浦に面し列状に形成された漁家率53.4％の中規模集落であり，平安時代から漁村として開かれ，平田のいるか漁，亀島のくじら漁は特徴的であった。歴史的にはぶり刺網（定置網）として栄え，現在も京都府一の漁獲高を誇る漁村である。伊根集落は典型的なぶり刺網の株持占有漁場制として発達して来たが，明治末期に漁場争議により水呑も株が持てる総有制に変った。現在は伊根町の中心集落として役場，消防署，警察官派出所，小学校，中学校，高校分校などが設置されている。昭和７年頃より漁業施設（漁協施設）が整備され現在第２種漁港として発展している。第２種漁港であるが防波場や築港施設は無い。自然の入江を利用した天然の良港である。（図２－１）

調査は２度に分け行った，第１次調査は40戸主として漁家を階層別に抽出し，実測調査とアンケート調査を行った。第２次調査は100戸を抽出し，アンケート及びヒアリング調査を行った。有効回収数89戸，23.5％の抽出率である。（表２－１，表２－２）

２－２　住空間構成

漁村住宅の住空間構成を屋敷内構成（主屋付属屋の関係），主屋の平面型構成及びそれらの面積構成より検討を行う。

(1)　敷地構成

崖下の密住狭後背地の伊根では数戸の旧庄屋を除いて屋敷構えは無い。住空間構成は図２－２に見るように崖下山側に主屋，海側に船屋または納屋を持つ構成である。多くの家は土蔵を持つが，主屋と同一敷地内に建築している例は少なく，崖の傾斜地や船屋側の空地に2間×1.5間 or 2間の大きさである。大部分の家は主屋のみで建ぺい率70～90％であり，他の付属屋は同一敷地内に建築できず，また，門や塀を造ることも不可能である。（図２－２）

(2)　住宅平面構成

伊根集落の住宅平面構成（間取り型）は大別して「田の字型系」と「たて列型系」である。図２－３に見るよ

うに田の字型系は正形4つ間型を基本に5つ間構成，6つ間構成がある。空間及び空間の呼称は図2－3に見るとおりであり，玄関土間側を「ダイドコロ」，土間側奥を「ナベザ」，ダイドコロの奥を「ザシキ」ナベザの奥は「ナンド」であり，土間は「ニワ」と呼んでいる。5室目は定った呼称は無いが「台所」「食堂」等呼び，6室目も定った呼称は無く「ネマ」や「オクのヘヤ」等呼ばれ，呼称のない家もある。基本の四つ間の呼称は統一されており，ほぼ同じ呼ばれ方をしている。5つ間構成で5室目を「台所」と呼んでいる家でナベザを「ナカノマ」と呼んでいる家もある。2階は1～3室構成で，小屋裏を改築した開口部の少ない暗い部屋で1室は寝室，他は物置等に利用され，呼称は無い。

たて列型系は短冊型敷地の住宅で「通り庭型」の住宅と「船屋主屋」の場合がある。近年建築のものはニワを板廊下にしており，ニワの呼称は無くなっている。たて列型系住宅は1階は2～4間構成で3間構成が多い。呼称はまちまちであるが主として玄関側は「ザシキ」次の間が「カッテ」または「ダイドコ」，3番目の室は「ナベザ」または「カッテ」である。4室構成の家では呼称が無いか「ハマノヘヤ」である。2階は3～4室構成で田の字型系住宅よりも充実し，また，1階よりも室数は多い。各室とも呼称はないが，海側の室は「ハマノヘヤ」と呼ぶ家も多い。（図2－3）

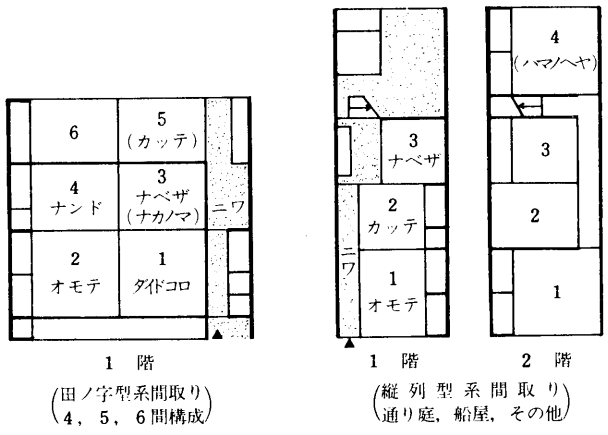


図2－3　住宅平面型モデル

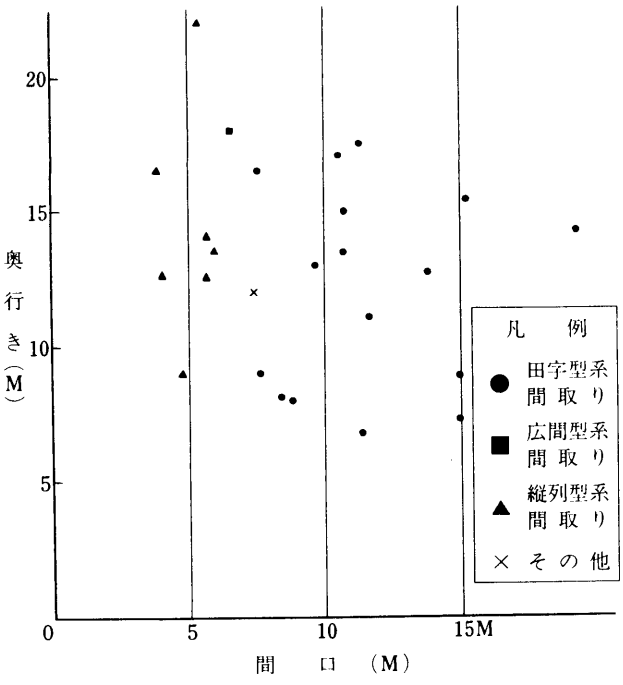


図2－4　伊根住宅間取り分布（間口－奥行関係）

なぜ田の字型系とたて列型系の2つの住宅形式が在るのであろうか。この2つの相違は敷地条件に規定されているといえよう。調査住宅の敷地を間口－奥行と住宅平面型との関係を見たものが図2－4である。たて列型系は全て間口5m近辺に集中しており，田の字型系は間口10m近辺及び15m近辺に集中している。田の字型系とたて列型系の分岐点は約7m（4間以下）である。間口が4間を越えると田の字型系住宅に，4間以下ではたて列型系住宅に分離する。田の字型系住宅は明治末期の漁場解放以前からの居住者でかつ持株漁民（本百姓）であり，比較的広い敷地が確保できたためで有り，たて列型系は昭和以後の住宅に多く，漁場解放で分家したか，定住するために新築した家が多い。すなわち住空間構成の相違は旧定住漁民層と新定住漁民層との相違といえよう。そして，それは歴史的には持株層と無株層という階級的差異ともいえる。

(3)　住空間の規模構成

住空間構成と各々の空間との面積規模には規則性がある。住宅平面型を建ぺい率と延床面積との関係より見ると図2－5のようになる。田の字型住宅の延床面積は80～210m²，平均138.5m²であり，建ぺい率50～93％であり平均建ぺい率73％である。たて列型系は延べ床面積70～190m²，平均116.3m²であり，建ぺい率は75～95％平均87.2％である。たて列型系と田の字型系では顕著な差異があり高密度やや面積小のたて列型系，やや高密度面積大の田の字型系と分化している。（図2－5）（図2－6）

各室の面積配分は，田の字型系は規則性があり，たて列系は余りない。田の字型系は図2－7に見るように，居室番号1は6畳または8畳，2，3，4の室も主として6畳で，従として8畳である。他の室は1，2階とも規則性はない。田の字型4室は6畳及び8畳構成で固定的である。たて列型は1階の2，2階の1の室に6畳間が多いが全体的には規則性はなく，2階1の室が全て6，8，10畳と規模が大きく充実している。（図2－7）（図2－8）

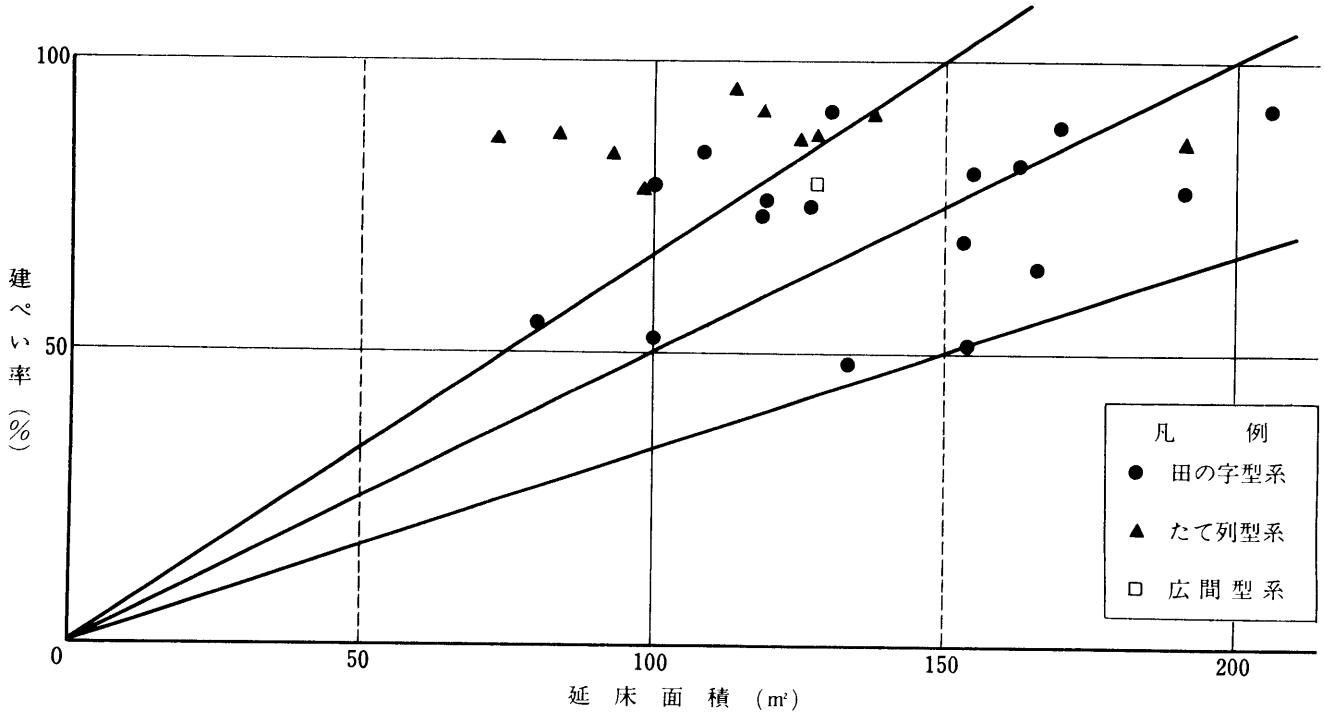


図２－５　延床面積－建ぺい率

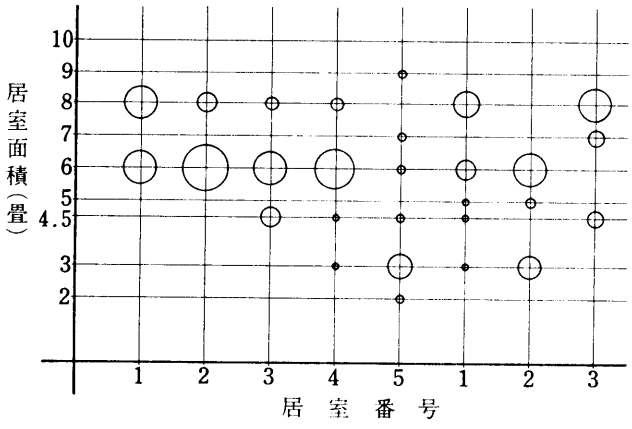


図２－６　田の字型系住宅居室規模

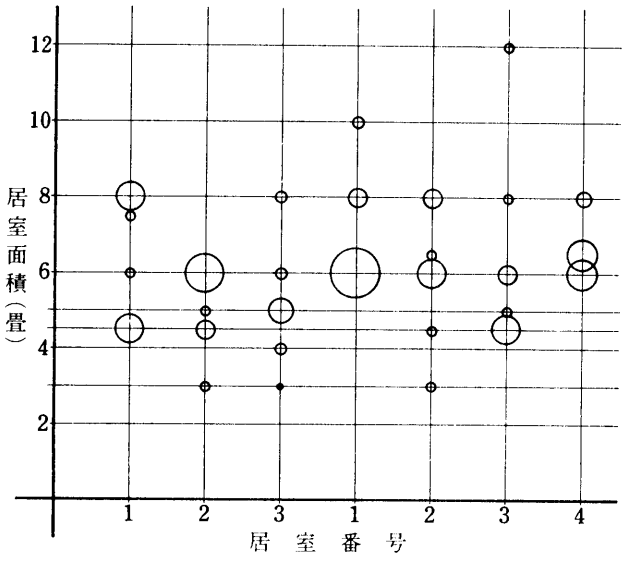


図２－７　たて列型系住宅の居室面積

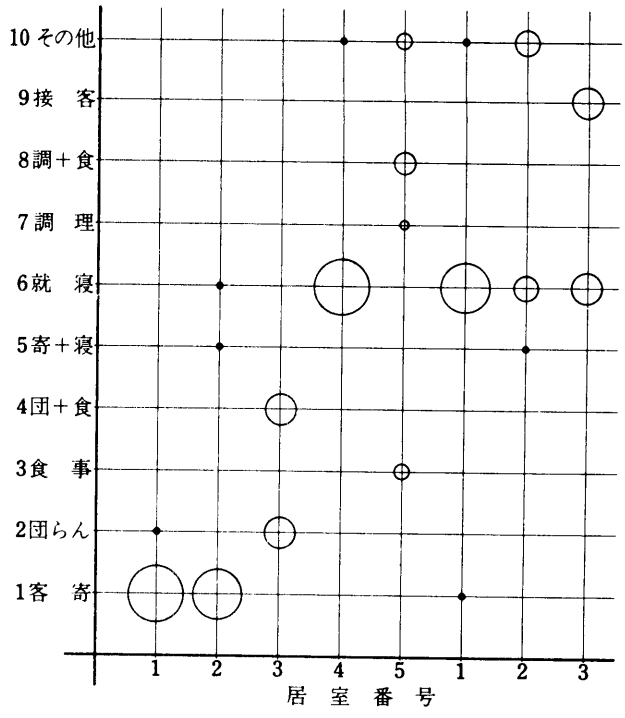


図２－８　田の字型系住宅居室の使われ方

２－３　住生活様式

住様式を日常の食事，就寝，団らん，接客家事等を日常生活とし，冠婚葬祭，講，オコモリ等の年１～２回の客寄せ行事を非日常生活とし，また，毎日の漁業活動を生産生活とし，３軸より住宅の使われ方の分析を行い漁村の住様式の検討を行う。

(1) 日常的生活

図2－8.9の様に田の字型系を1階1～6，2階1～2と番号を付け，たて列型系を1階1～3，2階1～4と番号を付け分析を行った。

田の字型系住宅の住様式は固定しているといえよう。1のダイドコロとこのオモテは客寄せの空間であり，講や冠婚葬祭に使われる。3のナベザは団らん，団らん＋食事であり家族生活の空間といえよう。4のナンドは老人または夫婦の就寝室であり，主寝室空間である。この4室は畳床であり使われ方，面積構成，仕上げもほぼ固定している。5の居室はカッテまたは台所と呼ばれており，調理や食事に使われている。床仕上げは板張りが多く，広さは2～9畳に分散している。2階は1～2間構成が多く，その位置は不規則である。2階は小屋裏か旧蚕室を改造したものであろう。使われ方は主として就寝であり，接客，その他にも使われている。仕上げは畳床で面積は2～8畳と不規則である。田の字型系は1階が形式化された空間で2階は不規則な貧弱な寝室空間といえよう。（図2－8）

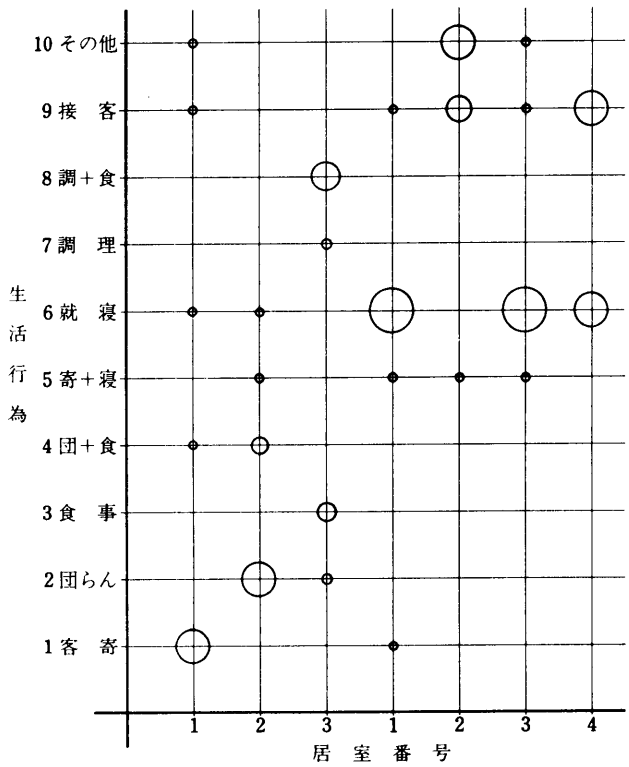


図2－9　たて列型系住宅居室の使われ方

たて列型系住宅は田の字型系と大きく異なっている。1階1のオモテは客寄せが主であるが，洋風応接間としている家もあり，就寝や食事室としている家もある。しつらえは床の間，仏檀，神棚などがある。このダイドコは団らん，次いで団らん＋食事であり，田の字型系のナベザに当り，家族の空間といえよう。3のカッテは調理＋食事，食事が主であり，田の字型系の5に相当し，床張り床のもある。4の空間は居室の場合と船屋または作業室の場合とがある。2階は主として就寝室であるが，この中間の室は接客，勉強，裁縫，その他と多様である。2階を客寄せ，客寄せ＋就寝の家も若干ある。たて列型系は1階は地域社会生活，家族生活のための空間及び作業空間となっており，形式は異なるが田の字型系と同じである。2階は個人生活空間及び個人的接客空間である。たて列型系は住様式の固定化は田の字型より弱く，2階が発達しており個人生活空間が充実している。（図2－9）

(2) 非日常的生活

漁業集落の非日常的生活としては結婚式，葬式，祭り，

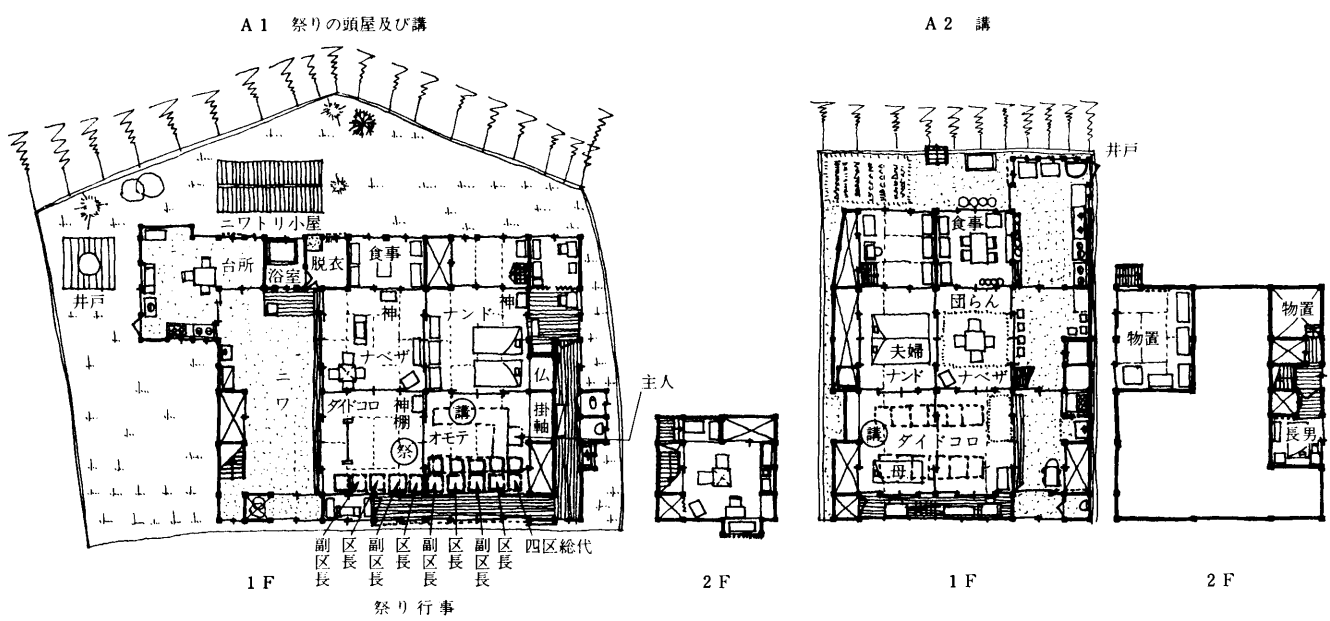


図2－10　田の字型系住宅の非日常的使われ方

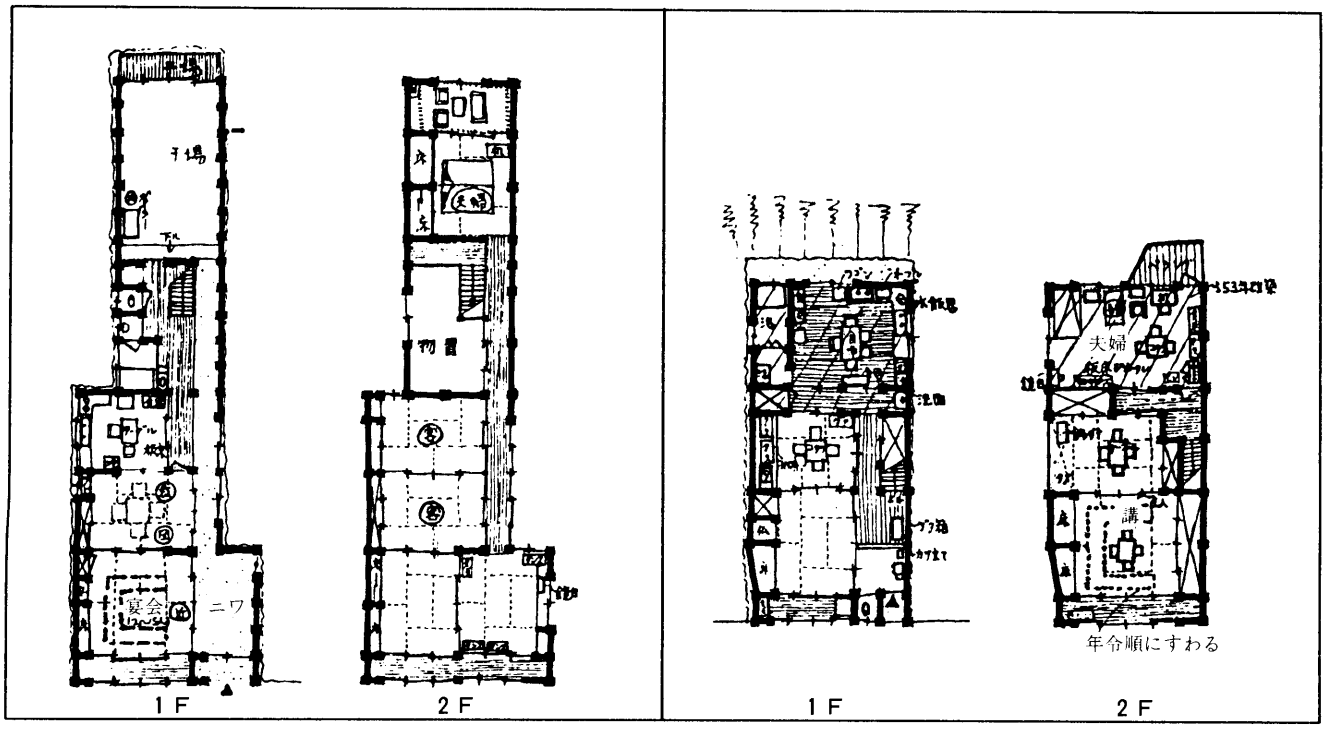


図２－11　たて列型系住宅の非日常的使われ方

講，オコモリがある。山岡栄市が「漁村社会学」の中で指摘しているように「講」が多いのが漁村の特色である。伊根にもオコモリはあるが房総のそれと異なり，老婦人，中婦人，若婦人，老人のオコモリ等性別年代別の区単位の組織であり，行事は地区公民館で行っており，住宅内では行わない。本稿では住宅内で行われる講と祭りについて検討する。

①　講と住生活

伊根における講は「蛭子様」と「えびす講」が大部分である。「蛭子様」は28人の組織１，他は全て９～10人である。「えびす講」も大部分が９～10人の組織である。加盟者は戸長または若家主（ワカエヌシ）である。

田の字型系の講の例会場所はオモテとダイドコの表座敷２室である。オモテの１室のみの家もあるが，大部分は２室を２間続きで用いる。会員のすわり方は床の間，仏檀を背にしてコの字型にすわる。主人の位置は床の間を背にする家と，これと反対の下座にすわる家とがあり定っていない。２間続きでオモテとダイドコロが使われる場合仕切りのフスマ戸または板戸は取りはずされる。講の時，ナベザは講の例会当屋の家族員のたまり場であり，講の茶やお菜の一時置き場になる場合もある。調理はカッテや台所で行われる。講の例会は全加盟員の家の持ち回り（輪番）制で行われる。（図２－10）

たて列型系住宅では道路に面したオモテの１室が多く講及び客寄せに使われている。２階の座敷を使っている家もあり，多くの場合１室を使っている。続き間で使う場合は１階のオモテとダイドコの２室の場

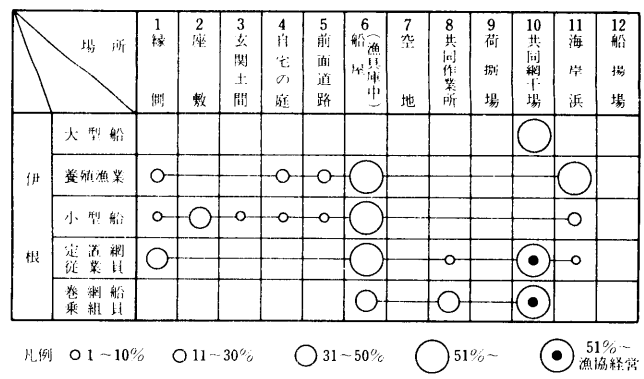


図２－12　階層別漁具手入れ場所

合と，うえの図の様に２階３室を続き間とする家とがある。たて列型系の場合１階のオモテ１室が主たる「客寄せ＝直会空間」であるが，余り固定的でなく２階の表座敷が「客寄せ空間」となる場合もある。２間続きとしての「客寄せ空間」もあるが１階に固定されていない。田の字型系では固定している「客寄せ＝直会空間」もたて列型系では固定性は弱い。すなわち，田の字型系では１階が地域行事としての社会及び神聖空間として形式化されているのに対し，たて列型系ではバリエイションがあり形式化は弱い。これはこのダイドコロが田の字型系のナベザの機能を有し，ここが直会空間＝客寄せ空間とはなり得ず，オモテの１室が田の字型系のオモテとダイドコの２機能を複合しているせいであろう。（図２－11）

②　祭りの住生活

祭りは全戸が頭屋になれるわけではない。伊根の旧亀

島村（立石，耳鼻，亀山，高梨）の4区では4区総代の家が頭屋となる。四区総代の家は祭り時に各区代表者達の寄り合いができるような広さが必要となり，以前の名主層から選ばれ，田の字型系住宅の家である。図2－10A1は現在四区総代を行っている家で100年以前に建築された。この家は以前の名主でかつ造り酒屋であり，現在主人は役場の特別職である。祭りは四区総代の前面道路で最初の行事が行われる。区別に異った催し行列がここで披露される。四区総代と各区長及び副区長と招待者は図2－10A1の様に総代のオモテとダイドコロの座敷にすわり，観賞，立合いを行う。最初の行事が終ると直ちに御座船，屋台船の渡船の儀に入るため，四区総代の家では直会は行われない。

オモテとダイドコロの2室は祭りの神聖空間であるが，この家全体が「お仮屋」的神聖空間といえよう。神棚はダイドコロの天井近くに土間（ニワ）に面してあり，この室の天井高は約2間あり，他の室との仕切りは板戸である。オモテの床の間には祭りの掛軸がかけられる。この家では講はオモテの1室のみで行われる。現在までのところたて列型系の家は頭屋にはなっていない。たて列型系の場合，この祭り立合いの形式は維持できない。

(3) 漁業生産と住生活

伊根は総合漁業であるが個人経営大型漁船漁業は1経営体のみであり，個人経営は小型漁船漁業が大部分で，養殖漁業7経営体，中型定置網1経営体である。漁業生産は主たる労働は水界で行われ，陸界では出漁準備，水揚，整理，漁具の手入れが行われる。本項ではまず住宅と関係の深い漁業生産の補助行為である漁具の手入れ場所について明らかにし，次いで，出漁準備－出漁－水揚－整理の一環行為と住空間との関係について明らかにする。

① 漁業生産補助行為と住空間

i 漁協経営漁業

漁協経営漁業は巻網船団漁業と大型定置網漁業がある。両方とも大規模な漁網を用いる。手入れをする場所は限定され，漁協の共同網干場で行われている。定置網従漁員は定置網操業後，個人的に一本釣り等を行っており，その漁具の手入れを自宅の縁側及び船屋で行っている。漁協の仕事は漁協施設で，私的な仕事は自宅及び自家船屋でと分化している。

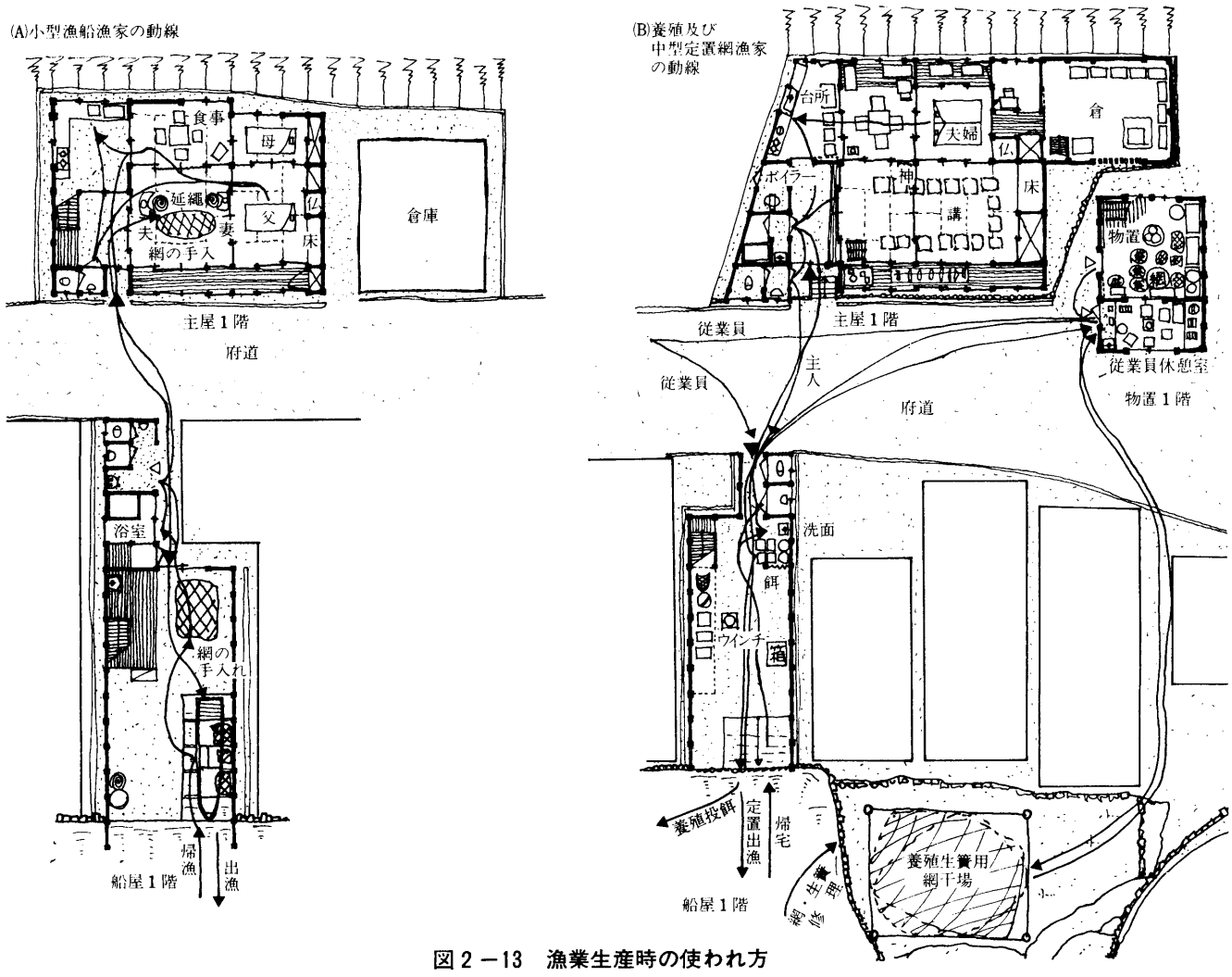


図2－13 漁業生産時の使われ方

ii　個人経営小型漁船漁業

小型漁船漁業は一本釣り，延縄，小型定置網漁がある。小型漁船漁業の漁具の手入れは主として船屋の中であるが，座敷も多い。大部分は縁側，座敷，玄関，自宅の庭，前面道路，船屋までの自宅の範囲内であり，生活空間と重複している。また，公的オープンスペースである海岸，浜も若干利用されている。

iii　養殖漁業

養殖漁業の漁具の手入れ場所は船屋と海岸浜に2分される。生簀の漁網は海岸，浜の空地または網干場として整備された浜で行われている。手網や小さな補助的器具類は船屋で行われる。餌料等でよごれる道具が多く，座敷や玄関では行われていないが，縁側，自宅の庭，前面道路で若干行われている。生活空間との重複性は小型船漁業に近い。

iv　大型漁船漁業

大型漁船漁業は15トン船が1隻のみで，巻網船漁業を営んでおり，大規模な漁網のため修繕は漁協の網干場で行っている。

②　漁業生産サイクルと住空間

出漁準備ー出漁ー水揚げー整理ー漁具の手入れの漁業生産サイクルと住空間との関係は漁法二階層により異なる。

伊根の代表的漁法の小型漁船漁業は図2－13－Aに見るように，起床ー洗面ー食事ー着（替え）までは主屋で，（着替え）ー出漁ー帰漁ー（水揚げ）ー整理ー洗面・（入浴）ー漁具の手入れは船屋で，また休養ー冬期漁具手入れは主屋で行っている。主屋と船屋が有機的に結合している。特に船屋に浴室が在ることは合理的である。また主屋は生産補助の空間でもある。

個人経営中型定置網及び養殖漁業では，主屋は起床ー洗面ー食事，休養の生活空間であり，朝5時に従業員と中型定置網出漁ー漁協へ水揚ー餌料積込みー投餌ー船屋へ帰宅ー従業員休憩室で従漁員は休養ー食事ー漁網の手入れである。漁業生産の補助空間は船屋と物置・従業員休憩室である。

2－4　住宅の変化過程

伊根集落の住空間及び住生活の変化過程を解明するために，建築年代及び増改築（図のスクリーントーン）を調べた。密住に規定され，田の字型系住宅から個室を確保したたて列型系へと変化している。以下時代を追って見る。

(1)　明治ー大正時代

約200年前に建てられた住宅が1事例ある。旧名主の家で造り酒屋を行っていた家で，現在は四区総代を行っている。建築当初は正型四つ間（田の字型）に広い土間（ニワ）を持つ構成であった。その後増築され現在は1階7間，2階1間である。2階の居室は小屋裏を改築したものであろう。小さな採光窓のみで通風や採光は考慮されていない。明治33年頃崖崩れがあり，約80年前に新築された家が多い。間取りは正型四つ間に土間を持つ型が大部分である。7事例中1事例のみが船屋主屋のたて列型（通り庭型）である。新築時は1階2室，2階1室の3居室で居住部面積は少ない。明治期は住宅は田の字型系が一般的で平屋造りが一般的であり，後に小屋裏を改築し1～2室居室を設け2階とした。したがって通風，採光は悪く居住性は劣る。地域社会を最重視し，次に家族生活を重視する計画ポリシィーで個人生活は考慮されていない。株持漁家層は本百姓であり，土間を持つ田の字型が一般的であったのであろう。大正時代も同じ傾向である。

(2)　昭和前期（戦前）

間取りは大きく変化する。すなわち，たて列型系が半数を占めている。明治末期の漁民争議により水呑層（無株漁民）も定置網株が持てる漁場の解放が行われたためか，分家，独立した漁家が増加したせいであろう。狭い宅地に住宅を建てなければならず，必然的に奥行きの長い通り庭型の住宅形式になったのであろう。正型四つ間型の住宅も半数ある。これら全ての住宅は新築時より2階建てである。1階の狭さを2階で補い，かつ個室化を進めつつある。しかし，土間は存在している。

(3)　昭和後期

調査事例中に昭和20年代の新築の家は見られない。戦争で男子出征，敗戦による不況が原因であろう。昭和33年以後に新築された家は7事例である。このうち田の字型系は6室構成住宅1事例のみである。この家は崖上の林間を整地し広い敷地が確保できたためである。他は全てたて列型系に属する。土間は無く，新築当初よりニワの部分は板張りの廊下である。2階は新築当初より設けられ，子供室，夫婦の寝室，客室，民宿用の室と充実している。

伊根集落の住空間変化は，地域生活を重視した平屋土間付田の字型から，その2階に1～2室の寝室を増築して2階化となり，次に，たて列型系が増加し，土間なし2階建て，個室化の進行と変化している。個室化は進んでいるが地域共同体重視の計画ポリシーは継続しているという変化過程である。（図2－14）

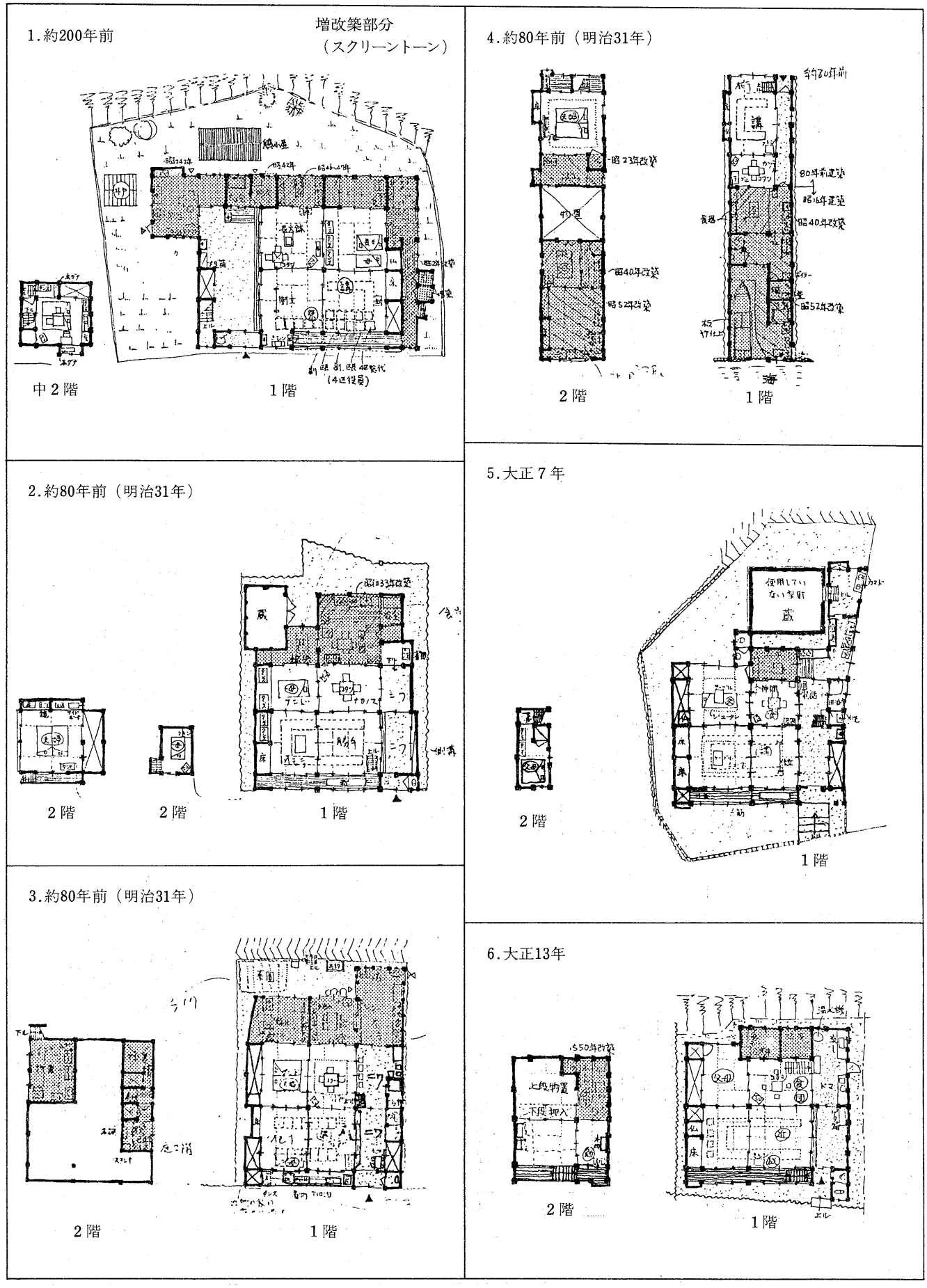
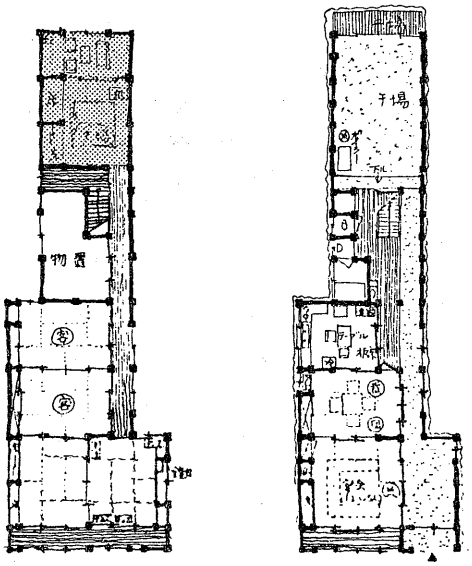


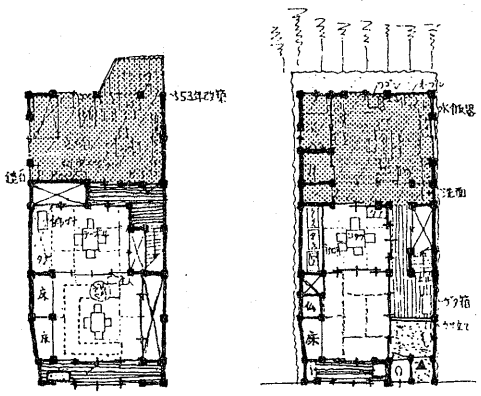
図２－14　伊根集落住空間の変遷

7.昭和９年



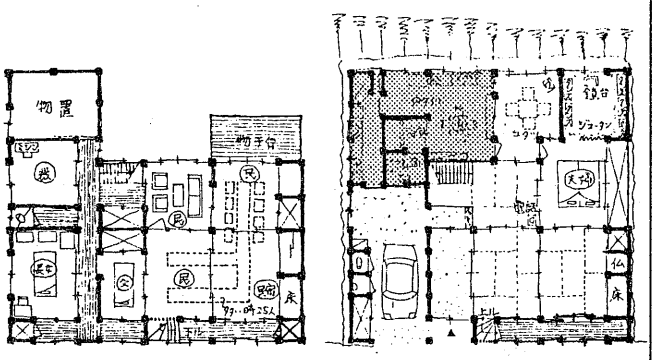
２階　　１階

8 昭和12年



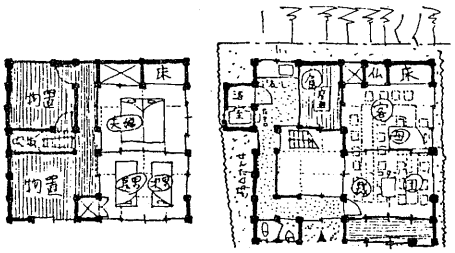
２階　　１階

9.昭和16年



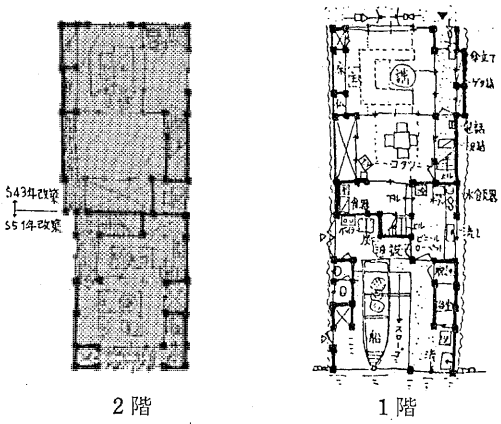
２階　　１階

10.昭和33年



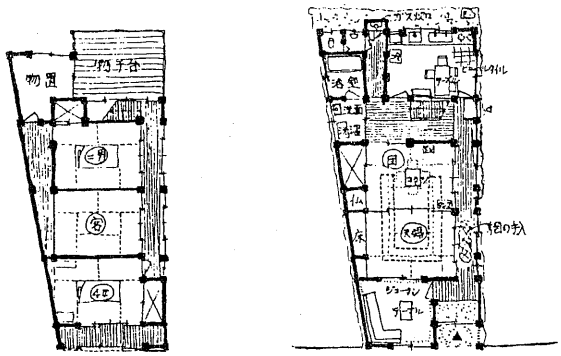
２階　　１階

11.昭和43年



２階　　１階

12.昭和51年



２階　　１階

〈注，スクリーントーン；増改築部分〉

3. 三重県相賀浦漁業集落

3－1 調査地及び調査対象

南勢町は三重県南部度会郡の沿岸地域で，五ヶ所湾を囲んでいる。五ヶ所湾は海岸線が複雑に入りくんだリアス式沈降海岸で，沖合は日本三大漁場の一つである熊野灘であり，湾内各所には様々な生産形態をもった漁業集落が点在している。

南勢町の人口の動態は，昭和30年，16,635人が昭和53年までの23年間に，14,533人に減少している。他方世帯数は3,050戸から3,502戸に増加している。年令別人口構成では35歳を境として若年層が減少し，高令者層が相対的に増加する傾向がみられる。

南勢町はその沿岸集落のほとんどが漁業を営むか，関連する世帯を含んでおり，主漁従農村か半農半漁である。しかし各々の集落が立地する地理的条件によってその漁業形態が変化している。

内湾性の沿海集落は潮位の変化が少なく，浅海域が広いので，海苔の栽培養殖が適している。又同時に後背地の緩斜面を利用した果樹園水田等の兼業化が進んでいる。

外洋に面した集落は漁場の拡大と漁法の近代化に伴ない，従来の沿岸磯根漁業から，沖合・遠洋漁業へと進出していった為に，根拠地，遠洋母村として変貌しつつある。

五ヶ所湾に立地する沿海集落は昭和30年代後半までは真珠養殖，母貝養殖等が盛んであったが，昭和40年に入り漁場の疲労・過剰生産等で経営が行づまり民宿や会社勤務，漁船員に転業し従来からの私企業的養殖業は後退しつつある。

自然環境条件のきびしい沿岸地域では必然的に集合してかたまりとして集住することが，防災上（風水害・波浪・津波等）不可欠な事であり，安全性が高い。それは集中的に防御し，共同して災害をくい止め自然力と拮抗する漁民の防御手段であり，生産活動に併う危険性を補い合う相互扶助の機能を持たなければならないからであろう。

狭溢な平地に高密度に集合する為に，漁家住居群の集住形態は，それぞれの集落の立地条件に対応して工夫されている。その典型的な集落として度会郡南勢町相賀浦地区があげられる。低地に立地する住居群は敷地をかさ

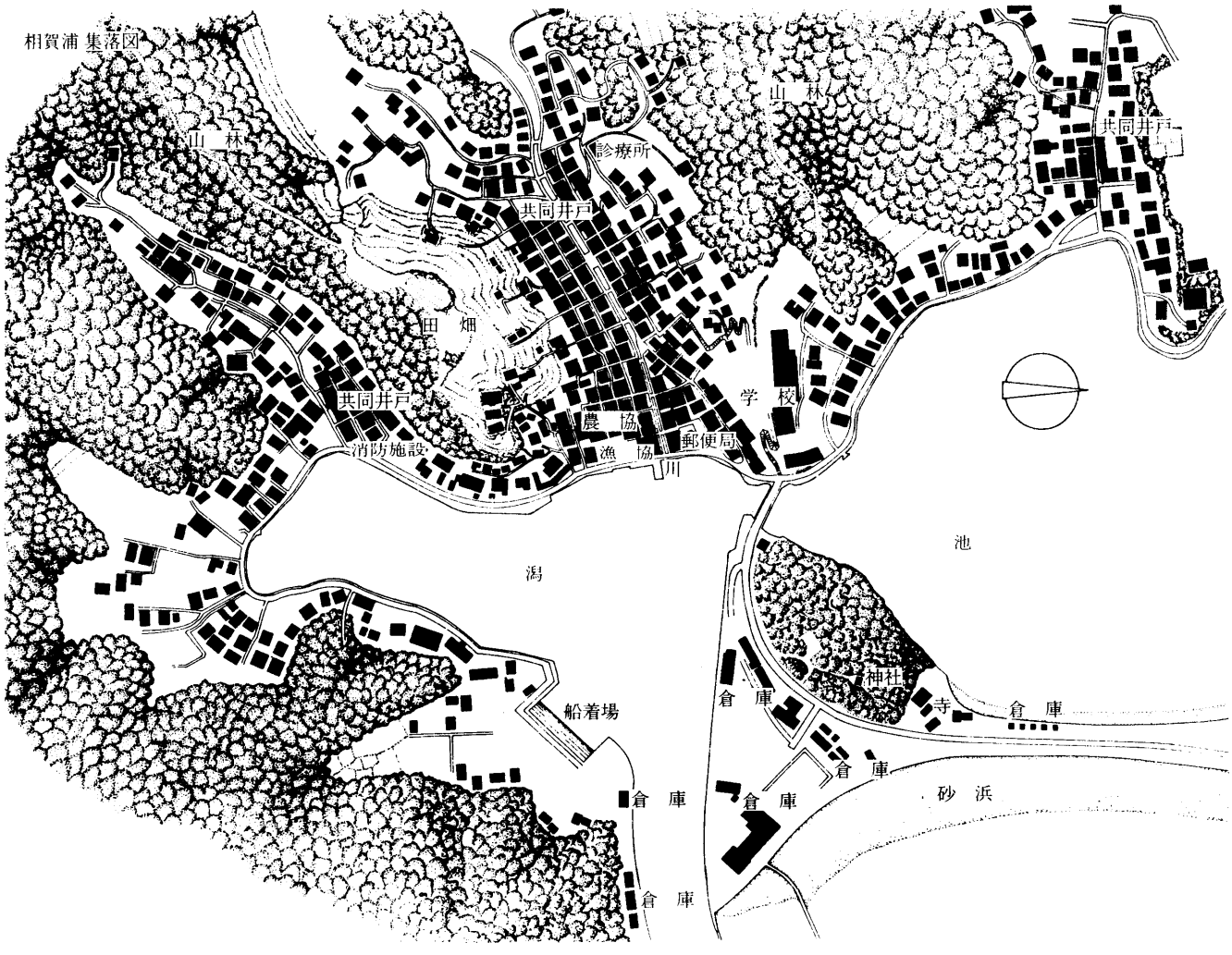


図3－1

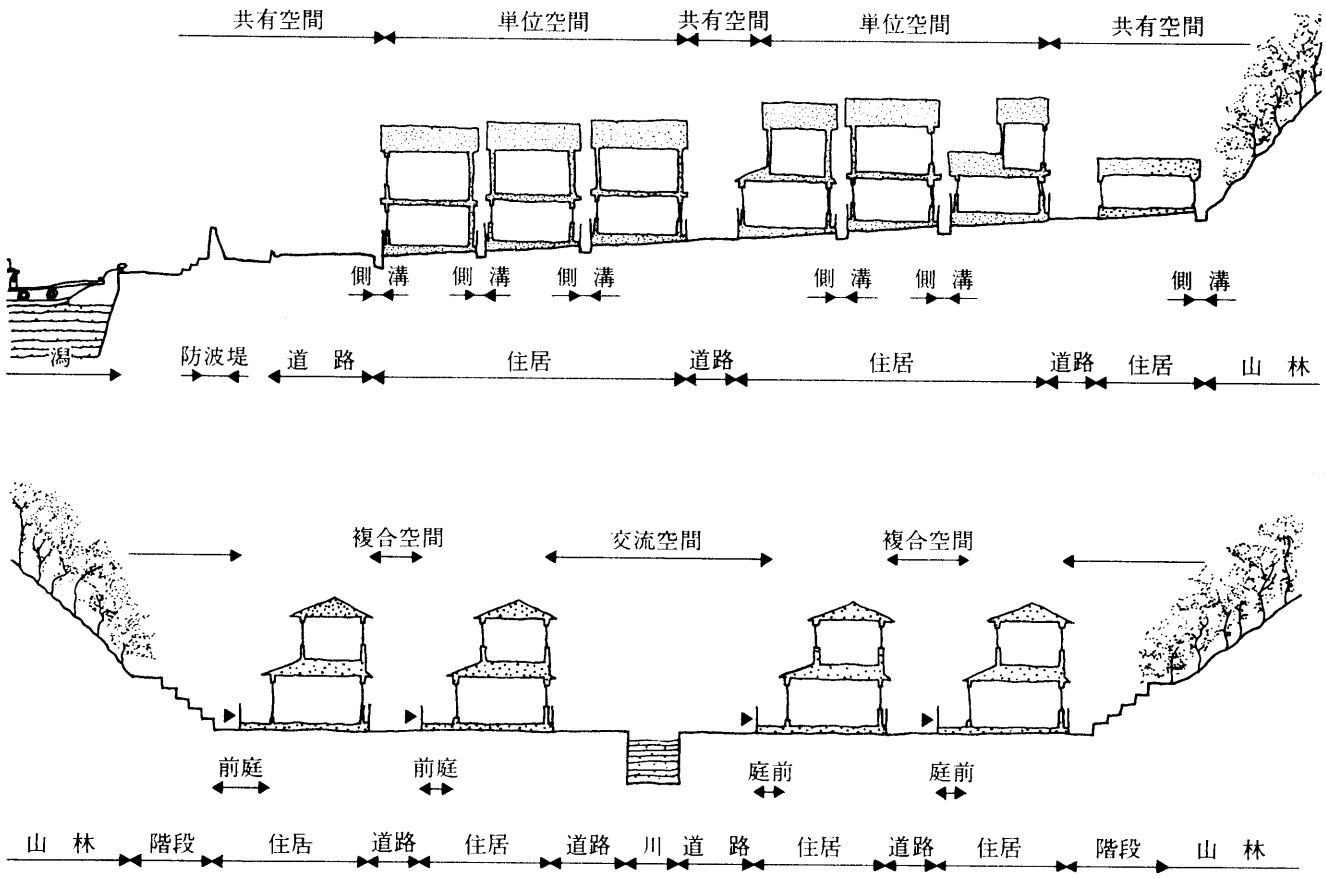


図3－2

上げして基壇をもうけて住居を建て，それぞれの水系単位ごとに隔壁や防御壁で区画し，浸水を防いでいる。

又通路脇に排水路を設けたり，排水路に水門をつけて逆流を防いでいる。集落全体が傾斜地に立地する場合もあり，擁壁や土留で地盤を強固にし，道や階段もコンクリートや石で造られ崩れない配慮をしている。井戸や洗場，貯水タンク，排水路や路地，物置や作業場が40戸位の単位で共有しており，200戸位の単位で消防機具や駐車場，倉庫，銭湯や集会所，網ほし場，舟揚場が備えられている。（図3－1）（図3－2）

又漁家住居は狭溢な敷地にぎりぎり一杯に家を建てるので，日照や通風が充分でないが，棟方向を統一し屋根も隣家に雨水が流れ落ちないよう配慮され，軒高も低くして5軒～10軒位連続している。基壇も5軒～10軒位の単位で統一している。排水路や路地の掃除は10軒位が交代でやり，空間的なまとまりとして機能している。

3－2　住空間構成

(1)　敷地構成

相賀浦の住宅敷地は総体的に狭溢であり，100m², 140m² 210m² に階層的に分布している。100m² 位の敷地は傾斜地にあり，斜面と平坦地の際には200m² 前後の敷地が形成され，計画的に区画された平坦地は120～140m²位に集中している。敷地内の配置としては，主屋は南に面しており，玄関が南に向いている。カッテはほとんど右カッテであり，狭い前庭に面して風呂・便所・物置がある。敷地は路地よりも一段高く，基壇状に盛土され，外周には塀がめぐらされている。建ぺい率は100m²位の敷地では70～80％，140m² 位では40～60％，210m² では20～40％である。この事から，建築面積（住宅規模）は敷地の広狭にはかかわらず，制約されていないことが明らかである。

更に100m² 位の敷地での住居平面型は並列型が多く，200m² の敷地では広間変形型がみられる。140m²の敷地は広間型または中廊下型がほとんどである。2階建は並列型と中廊下型に多い事，中廊下型のほとんどは主屋内に風呂・便所がある事，広間型・広間変形型は外風呂・外便所が大部分で近年改造されている事が主な特徴であろう。

(2)　住宅平面構成

相賀浦の住居は，平面構成から広間型・広間変形型・並列型・中廊下型に分類することができる。本研究では住宅平面56例をとりあげ考察した。

〔広間型〕　ある広い部屋を中心にその周囲に部屋がある。ここではダイドコと呼ばれている部屋が広間になっており，食事や団らんの場になっている。ダイドコの手前に2畳または3畳のアガリタテと呼ばれる部屋があるが，ほとんど部屋としての機能はもたない。

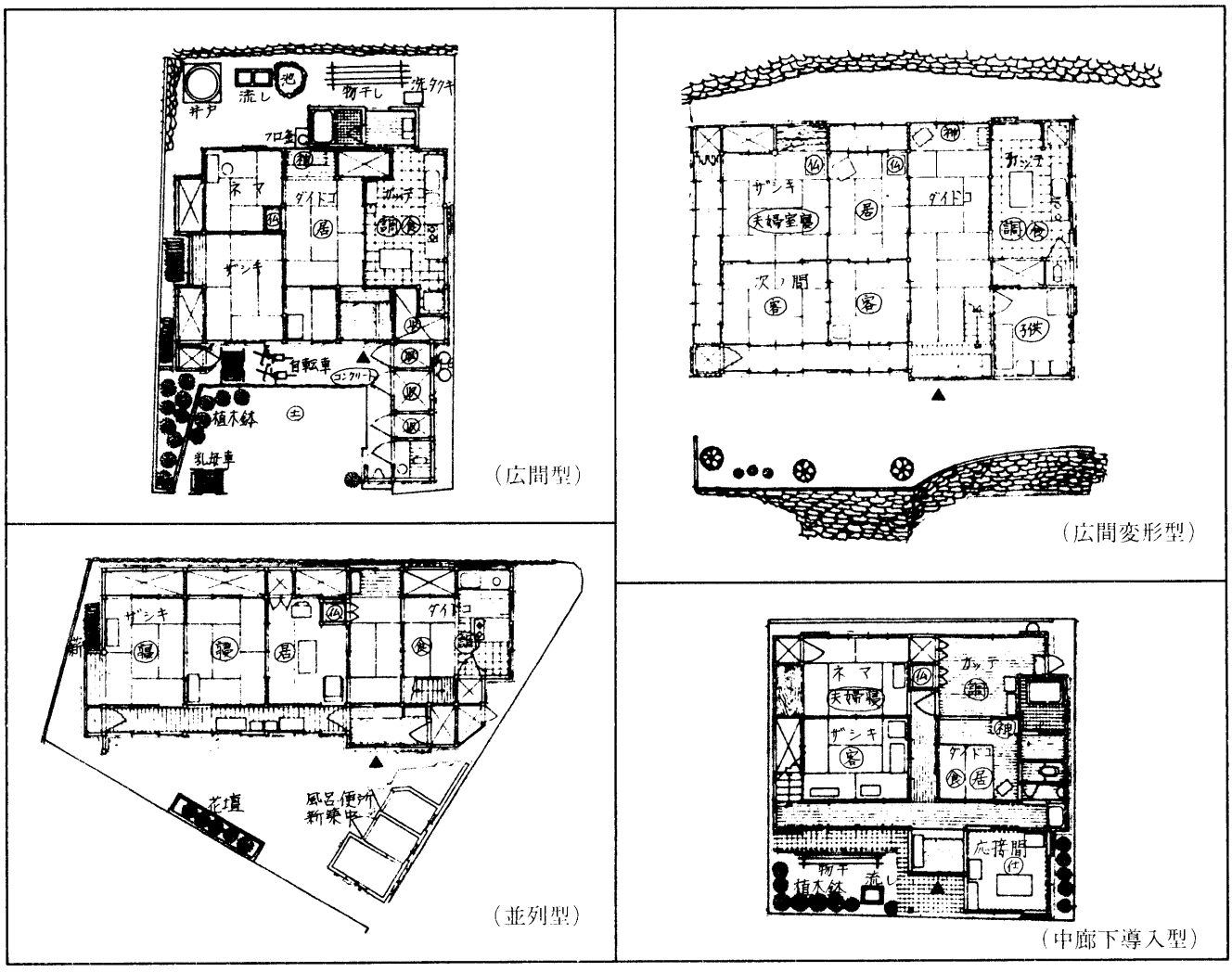


図3－3

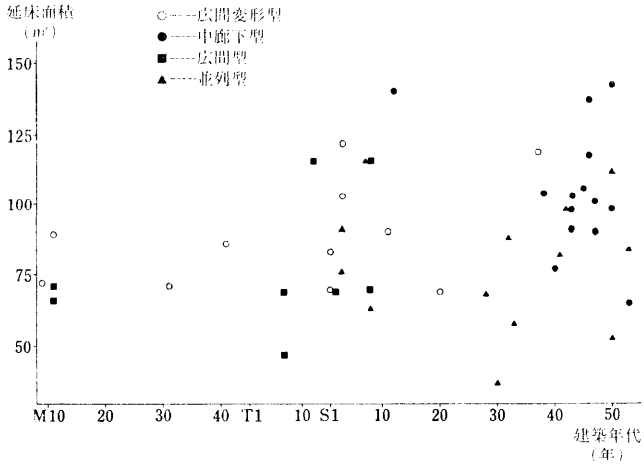


図3－4　建築年代と規模

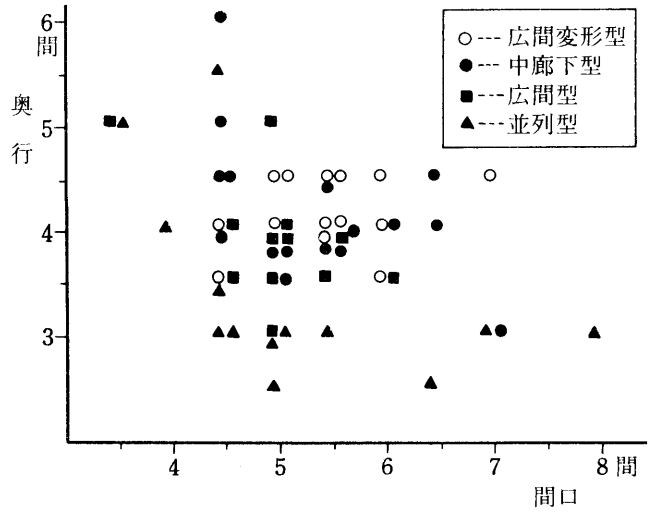


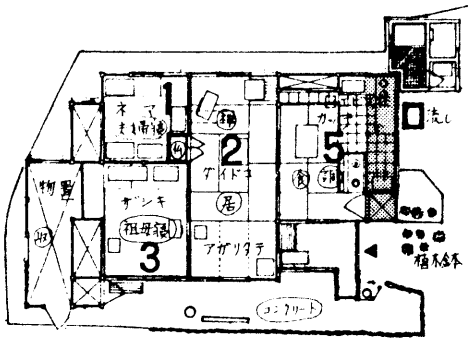
図3－5　間口と奥行

〔広間変形型〕　広間変形型は，四間・五間・六間構成のものがみられる。その典型として，「ネマ・ザシキ・ダイドコ・アガリタテ」または「ザシキ・次の間・ネマ・ダイドコ」の4室で主屋を構成している。

〔並列型〕　ネマ・ザシキ・ダイドコ・カッテ等の居室が2室以上1列に並んでいるもの。縦列と横列の場合があり，片側廊下のものも含む。

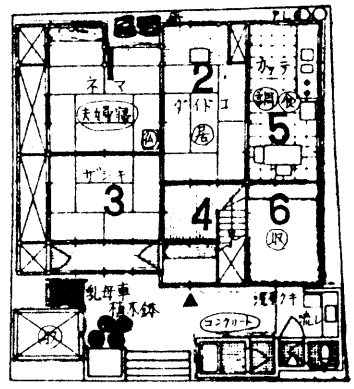
〔中廊下型及び中廊下導入型〕　部屋と部屋の間に廊下が加わったもの。田の字型中廊下導入，併列型中廊下導入，広間型中廊下導入型と区分することができる。

広間型・広間変形型は相賀浦における平面基本型であ



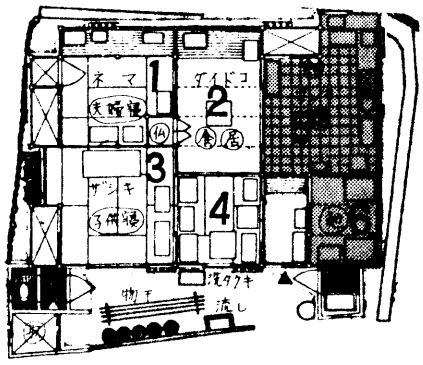
a 明治11年以前
b 102.0 m²
c 71.38m²
d 71.38m²
e 70.0 %
f 3 人
g 漁 業

ダイドコを中心にネマ・ザシキ・カッテがあり，ダイドコが日常生活の中心の場．ネマ・ザシキは壁で仕切られている．ネマ・ザシキは寝室として使用．外風呂・外便所．カッテを増築．



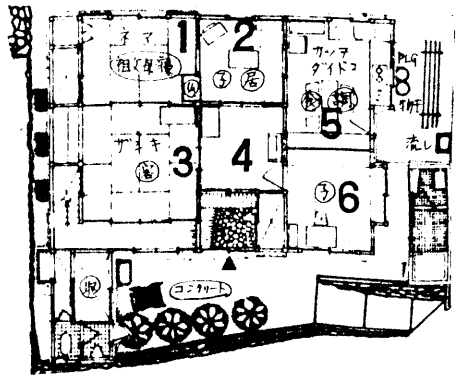
a 昭和8年
b 99.0 m²
c 70.34m²
d 70.34m²
e 71.1 %
f 2 人
g 勤 務

ダイドコを中心にネマ・ザシキ・カッテがある．カッテは板の間で食事形式は調理場でのイス式．ネマ・ザシキは襖で仕切られている．カッテの隣に収納スペースを設けている．外風呂・外便所



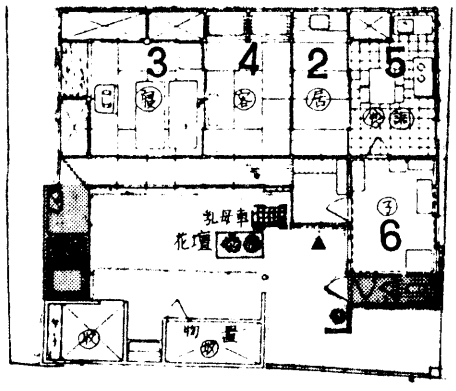
a 明治41年
b 114.8 m²
c 86.32m²
d 86.32m²
e 75.2 %
f 6 人
g 勤 務

ネマ・ダイドコ・ザシキ・アガリタテの4室で喰違田ノ字を形成．ネマ・ザシキは壁で仕切られている．ネマ・ザシキを寝室に使用．昭和47年カッテを改築．昭和44年玄関脇の物置きを勉強部屋に改築．



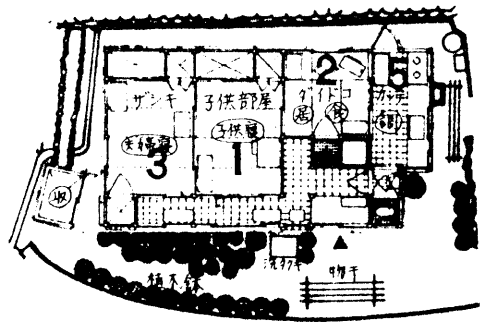
a 昭和37年
b 140.6 m²
c 78.85m²
d 118.69m²
e 56.1 %
f 7 人
g 漁 業

ネマ・居間・ザシキ・アガリタテの4室で田ノ字を形成．ネマ・ザシキの仕切は襖で，ザシキは接客専用．玄関右隣りに子供室が設けてある．食事はカッテでイス式．外風呂・内便所．2階建て．



a 昭和3年
b 156.0 m²
c 76.02m²
d 76.02m²
e 48.7 %
f 4 人
g 勤 務

ザシキ・次の間・ダイドコ・カッテが一列に並び，間仕切りはすべて襖．食事はカッテでイス式．昭和48年風呂の改築（家の中から入れるようにする）．昭和43年便所をブロック造に改築．片廊下．



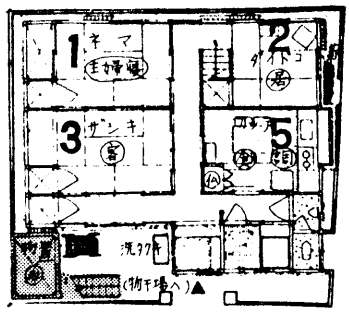
a 昭和50年
b 144.0 m²
c 53.12m²
d 53.12m²
e 36.9 %
f 4 人
g 自 営

ザシキ・子供室・ダイドコ・カッテが一列に並び，間仕切はすべて襖．ザシキは夫婦寝室として使用．山側の斜地に立地しているため，敷地が細長い．内風呂・内便所．片側廊下．

り，昭和の初期頃まで建てられている。昭和に入ってからは並列型が建てられるようになり，昭和34年の伊勢湾台風以降，中廊下型が主流となる。

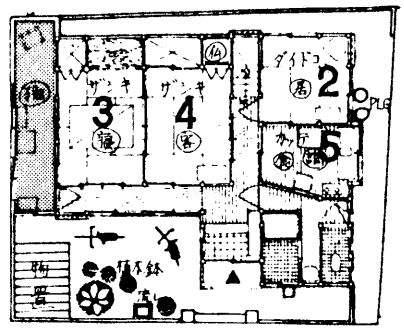
(3) 住空間の規模構成

敷地は，前述の如く100m²（30坪），120m²～160m²（45坪），200m²（60坪）に大別することができる。30坪と45坪の敷地は区画がかなり計画的に区分されており，方形に近い形状である。30坪以下や60坪以上の敷地は矩形である場合が多い。建ペイ率は敷地規模が大きくなるにつれて，低くなる傾向がみられる。（90%→



a　昭和43年
b　88.0 m²
c　62.25m²
d　91.30m²
e　70.7 %
f　4 人
g　勤 務

ネマ・ザシキ，ダイドコ・カッテが各々縦に二間続きで，中央に廊下が通っている．食事はカッテでイス式．昭和50年前庭の物置の上に物干場を増築．内風呂・内便所．2階建．



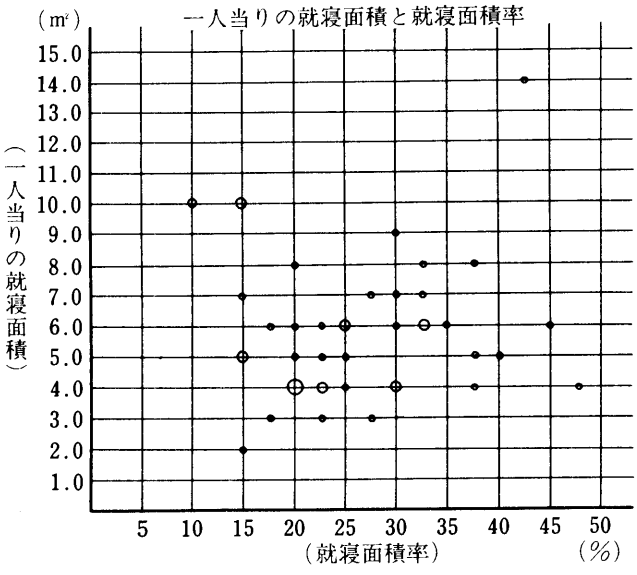
a　昭和40年
b　108.0 m²
c　67.55m²
d　76.78m²
e　62.5 %
f
g

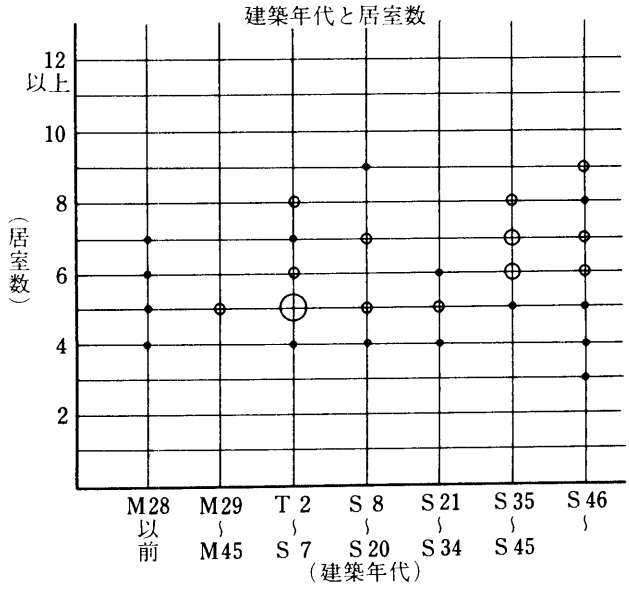
二間のザシキが横に続き，カッテ・ダイドコも二間続きであるが，ザシキとの間に廊下が通っている．食事はカッテのイス式．昭和52年子供勉強室を増築．内風呂・内便所

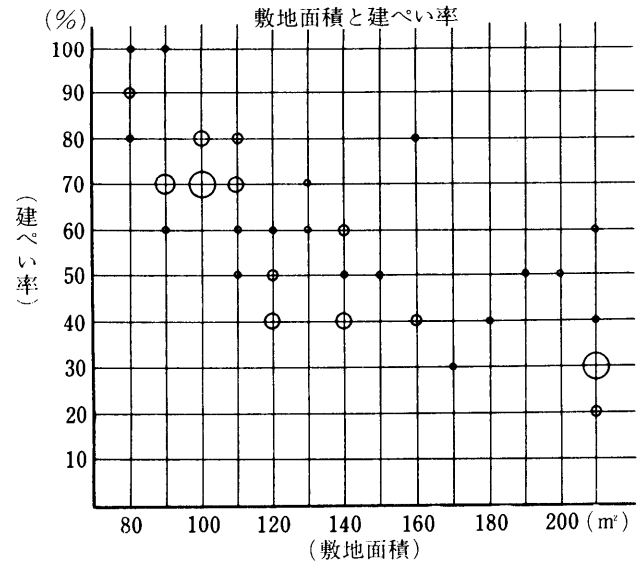
1.ネマ　2.ダイドコ　3.ザシキ　4.アガリタテ（次の間）　5.カッテ　6.部屋

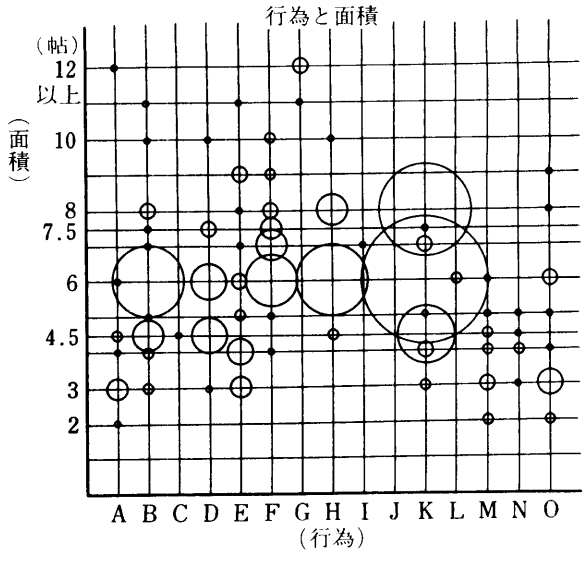
a 建築年代　b 敷地面積　c 建築面積　d 延床面積　e 建ぺい率　f 家族数　g 世帯主の職業　▨増改築箇所

図3－6　類型別住居平面図









A：客寄　B：団らん　C：食事　D：団＋食　E：調理　F：調＋食
G：団＋食＋調　H：接客　I：団＋接　J：団＋食＋接　K：就寝
L：就＋接　M：作業　N：収納　O：その他

図3－7

20％）

住宅規模は70m²（20坪前後）の住宅が大部分を占めている。もっとも小さな住宅は50m²（15坪）で，大きな規模の住宅は130m²（40坪）であることがあきらかである。漁村住宅の住宅規模はかなり明確に階層分化していると考えられるが，それは敷地においてであり，住居については，それほど差異がみられない。

住居の室構成は6帖が多く，次に8帖，4.5帖，3帖の順に多い。8帖は就寝に使われ，6帖は団らん，接客，調理＋食事に使われる事が多い。収納・作業は4.5帖，3帖を利用している。

就寝室は中廊下型では面積が大きく，広間型や田の字型は就寝分解ができにくく改築・増築が頻繁におこなわれている。（図3－7）

3－3　住生活様式

(1)　日常的生活

相賀浦の住宅は殆んどの類型が座敷を就寝室にしているが，並列型・中廊下型は就寝分解の傾向が顕著であり，3～4就寝室のものが多い。一方広間型や広間変形では1～2就寝室で未分化である。共通して食事と就寝が分離されており，調理と食事が一室で行われる例が多い。又収納スペースは単一目的で設けられることは少なく，ほとんどの場合就寝室が収納にも利用されている。

接客の為の室は特別になく，ダイドコ(2)で団らん，接客が複合的に利用されていることが多い。

広間型は平屋建がほとんどで，近年附属屋として物置や風呂・便所を設けている。広間変形型，並列型は比較的似かよった使われ方をしている。中廊下型は2階建が多く，2階での生活は就寝・収納がほとんどで，1階のザシキは接客空間として利用している傾向がみられる。

〔広間型〕　1＝（就寝），2＝（団＋食＋調）・（団らん），3＝（就寝），5＝（調＋食）・（調理）である。ダイドコは，カッテと一室になっているのもあり，（団らん）（調理）（食事）の複合空間を形成する。また建築年代が古く平家が大部分で居室が少なく，ダイドコは日常生活の中心の場として使用し，ネマとザシキを寝室として使うことになり，ザシキの接客の機能が薄れている。

〔広間変形型〕　1＝（就寝），2＝（団らん）・（団＋食），3＝（就寝）・（接客），5＝（調＋食）・（調理）である。田の字型のダイドコとカッテはほとんど分離している為，ダイドコは（団らん），カッテは（調＋食）と広間型よりはっきりとした傾向を示している。居室数は広間型より多く，これらが（就寝）を賄うことにより，ザシキが接客の機能を有するようになる。

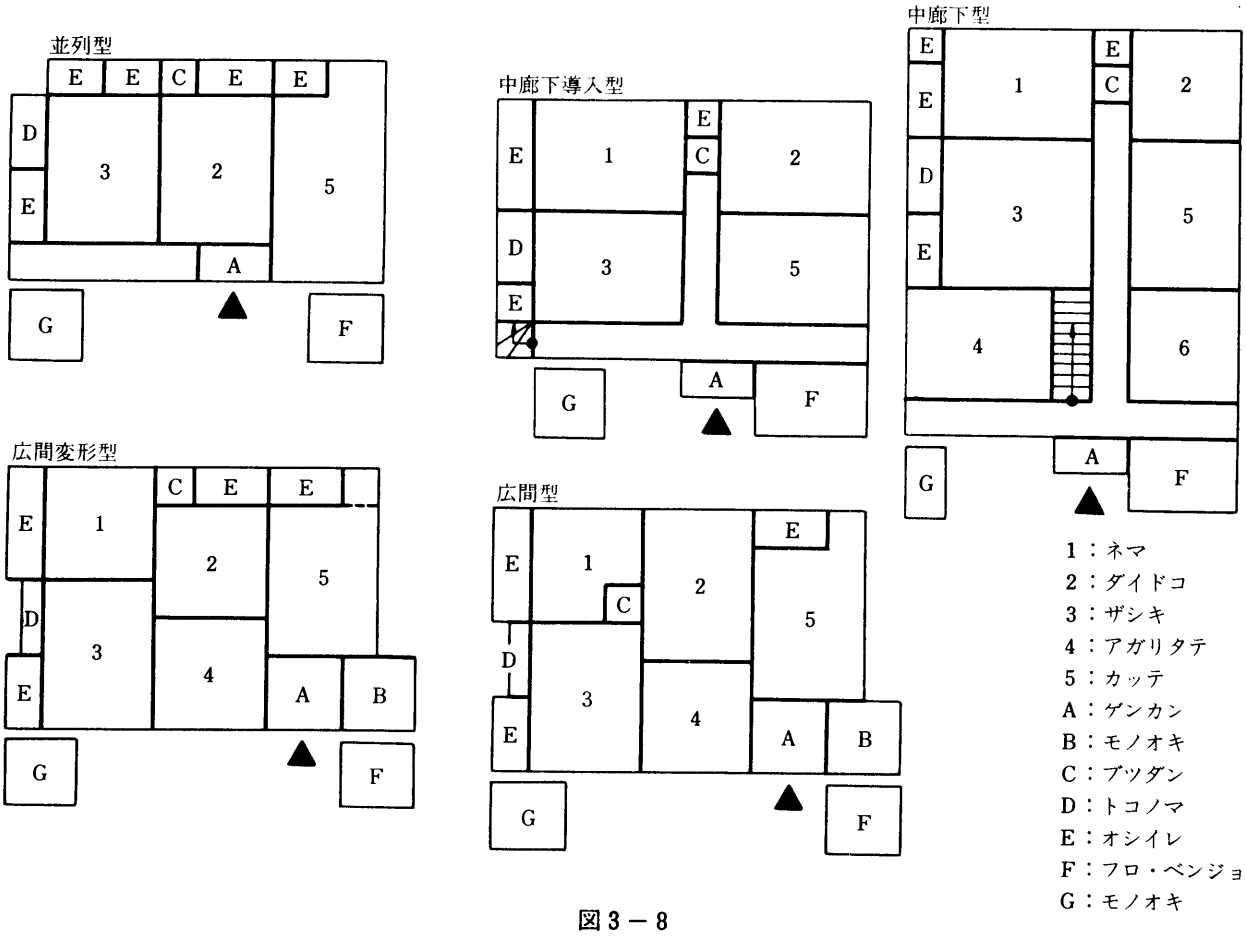


図3－8

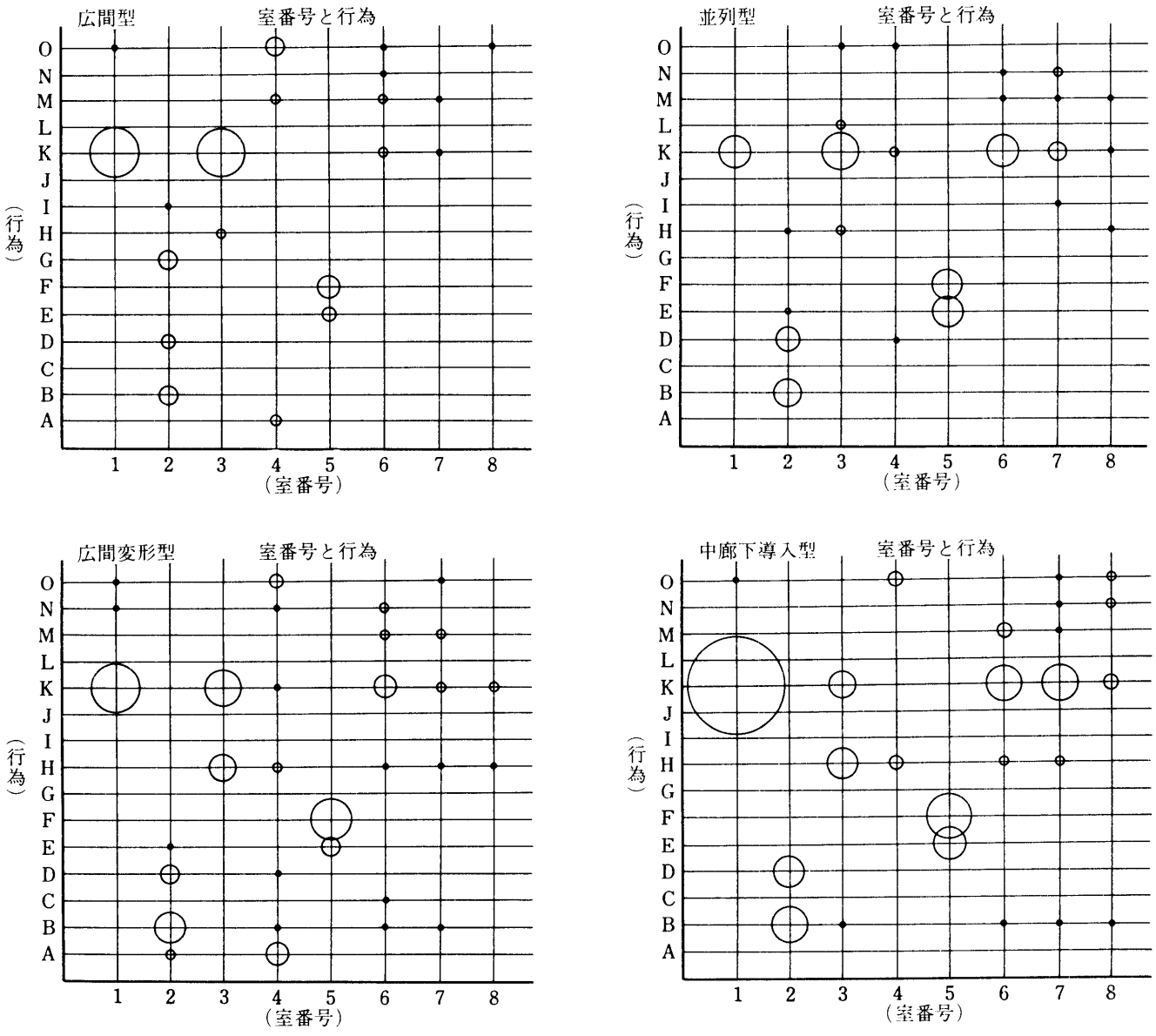


図3－9

〔並列型〕　1＝（就寝），2＝（団らん）・（団＋食），3＝（就寝），5＝（調＋食）・（調理）である。1階には必ずネマがあるとは限らず，ザシキが寝室となっているものが大部分である。また2階建が多く，2階居室の（就寝）依存が高い。

〔中廊下型及び中廊下導入型〕　1＝（就寝），2＝（団らん）・（調＋食），3＝（接客）・（就寝），5＝（調＋食）・（調理）である。中廊下型も2階建が多く，2階居室の（就寝）依存が高い。したがって1階ザシキに対する（就寝）依存は低い。

以上より，1（ネマ）＝（就寝），2（ダイドコ）＝（団らん）・（団＋食），3（ザシキ）＝（就寝）・（接客），5（カッテ）＝（調理）・（調＋食）として日常使われているといえる。ザシキの行為が平面型により多少違いが出るが，4類型とも呼び名と行為の関係は共通していると言える。ダイドコとカッテの行為は連続性のあるもので，日常生活の中心となり動的空間を形成し，ネマとザシキは静的空間といえる。（図3－8）（図3－9）

(2)　非日常的生活

1）地域行事における住居の使われ方は，人寄せの場合ほとんどザシキとネマを連続して利用され，しつらえ，あいさつはダイドコで行われる。集会施設等は漁協が唯一である。

集落は明治3年に全戸流失しており，現在の場所を造成し，宅地化したので，明治以前の慣習や住まい方が一新されているために地域行事が頻繁ではない。

2）漁業種類は養殖と遠洋漁業で，沖合・沿岸の漁船漁業が少ないために住居内での作業はほとんど行われないが，物置や漁具置場として敷地内のスペース

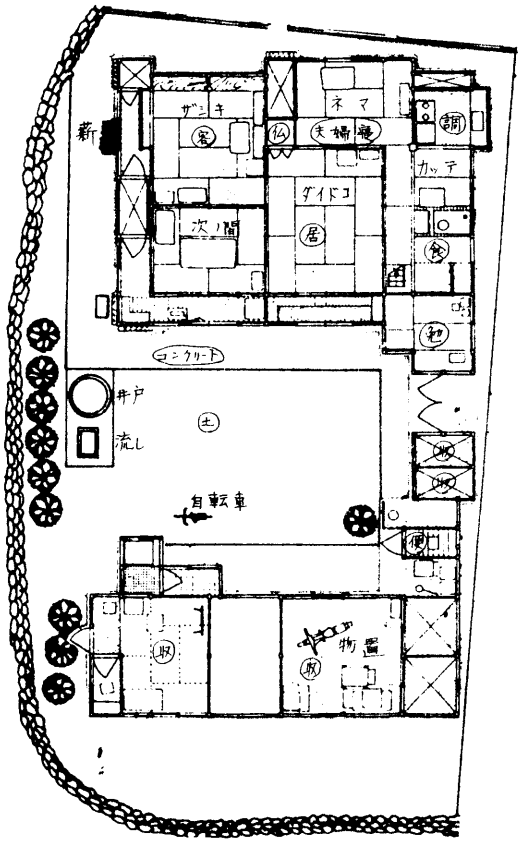


図３－10　注連掛祭の頭屋の住宅平面と中庭

	改　築（増　築）箇　所											
		軒数	カッテ	ダイドコ	フロ	便所	廊下	勉強部屋	２階	別棟	客間	物干
広間型	⑫	4(3)	2(1)	1	2	0	1	1	0(1)	0(1)	0	0
田の字型	⑭	8(3)	6	1	2(1)	1(1)	1	2(2)	0	0	(1)	0
並列型	⑭	5(1)	1	0	4(1)	2	0	0	1	0	0	0
中廊下型	⑯	0(3)	（内装１軒だけ）					(1)	(1)	0	0	(1)
計	56	17(10)	9(1)	2	8(2)	3(1)	2	3(3)	1(2)	(1)	(1)	(1)

を確保している住宅が多くみられる。養殖施設は浜にある漁具倉庫（個人）に収納し，そこで作業を行う。更に磯根・沿岸漁業は漁港の岸壁を利用し，出漁準備やしつらえをしている。

3）相賀浦の村社である大賀神社の祭礼は「注連掛祭」と称し当屋にて式典を行い，庭に杭を立て注連を張り斎庭として当屋での飲食・火焚をしない。近年祭は簡素化されつつあり，住宅を利用しなくなっている。同じ事が結婚式・葬式にもいえる。寺・神社等やその他の施設を利用している場合がほとんどである。

住宅が小規模であり，更に日常的な交流が頻繁であり，また集落がまとまっているので地域行事その他非日常的な利用は少なくなっているのが現状である。日常生活における付き合いが非日常的な出来事を円滑に処理するための安全弁の機能をはたしている。（図３－10）

３－４　住宅の変化過程

(1)　増・改築にみられる変化

広間変形型の改築が多く，並列型がその次に多い。しかし中廊下型はほとんど改築がない。

広間型・広間変形型・中廊下型に増築があり，カッテ，ダイドコ，フロ，便所，勉強部屋，２階，別棟，客間，物干が増築されている。

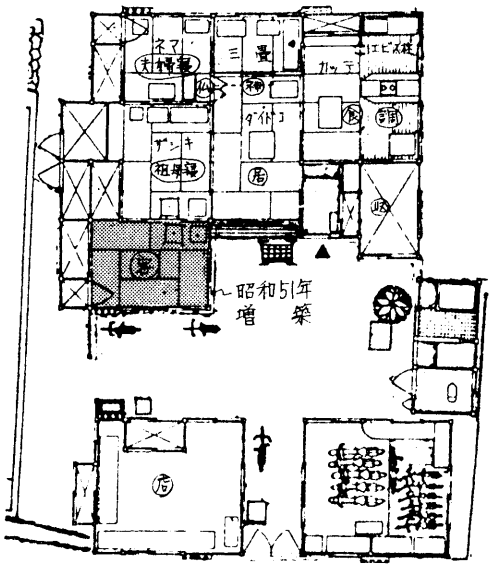
改築はカッテ，フロが多く，広間変形型のカッテの改築が多い。広間型，並列型はほとんどの場合フロの改築が行われている。

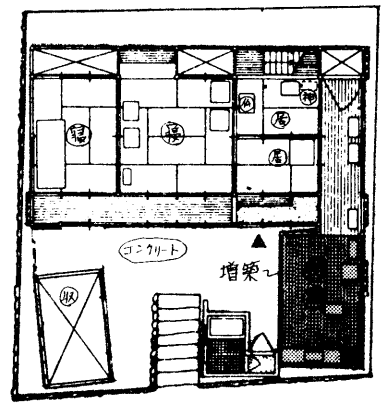
相賀浦は敷地が狭溢で増築が困難なので，色々手をつくして改築していくが，それが出来ない場合は一気に新築・建替をすることが一般的である。（図３－11）

〔改　築〕

○カッテの天井・床板・設備交換

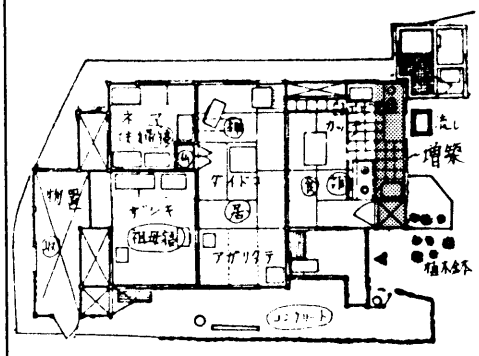
○ダイドコの板の間を畳にする



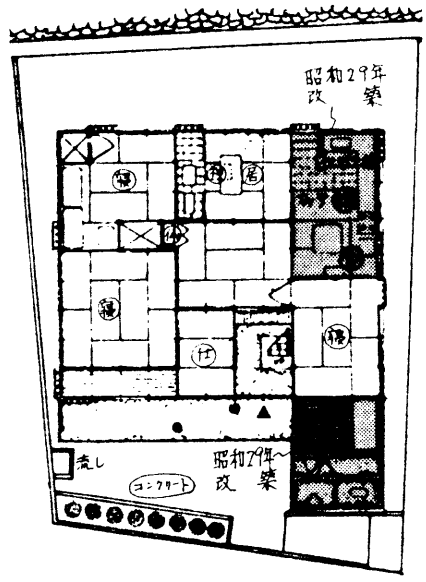


玄関先の３畳２間はワンルームとして使用.

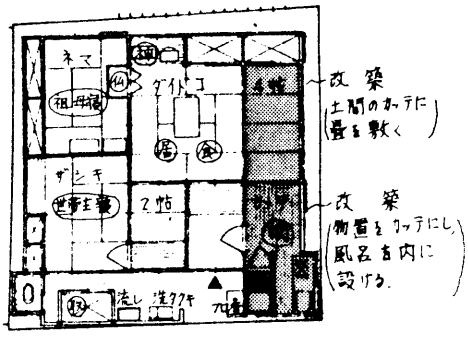
図３－11　増改築の例



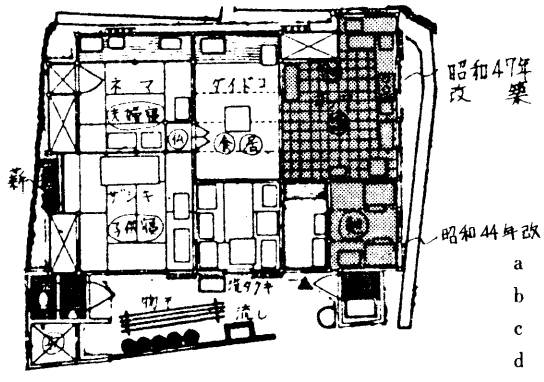
a　明治11年以前
b　102.00㎡
c　71.38㎡
d　71.38㎡
e　70.0 %
f　3　人
g　漁　業



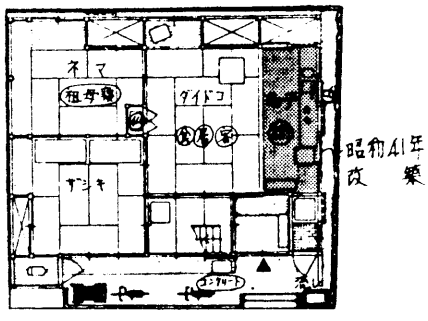
a　明治11年
b　191.20㎡
c　88.81㎡
d　88.81㎡
e　46.4 %
f　8　人
g　漁　業



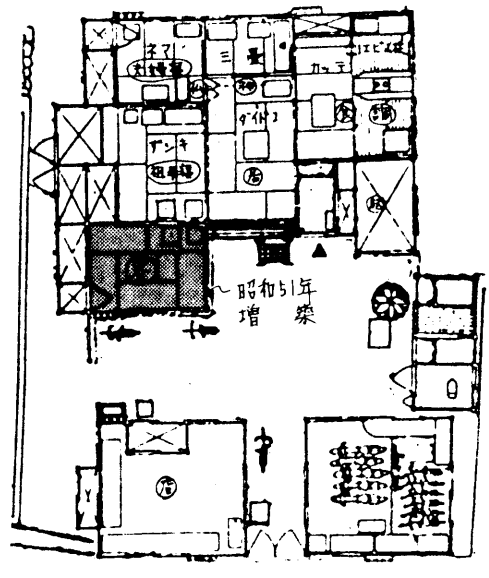
a　大正7年
b　92.00㎡
c　68.48㎡
d　68.48㎡
e　74.4 %
f　3　人
g　漁　業



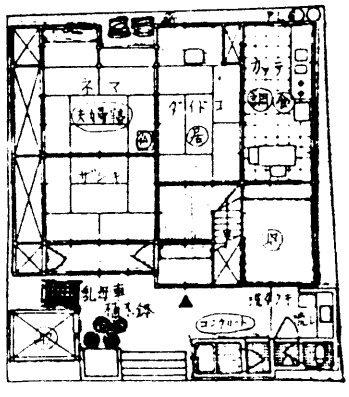
a　明治41年
b　114.80㎡
c　86.32㎡
d　86.32㎡
e　75.2 %
f　6　人
g　勤　務



a　大正12年
b　92.40㎡
c　69.31㎡
d　115.79㎡
e　75.0 %
f　7　人
g　農　業

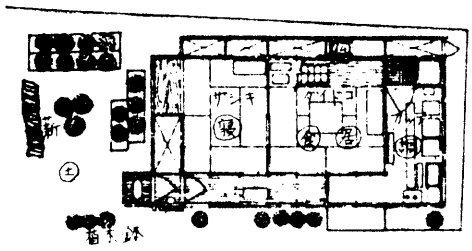


a　昭和1年
b　245.60㎡
c　83.00㎡
d　83.00㎡
e　33.8 %
f　3　人
g　勤　務

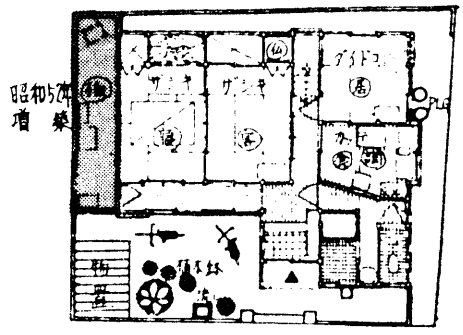


a　昭和8年
b　99.00㎡
c　70.34㎡
d　70.34㎡
e　71.1 %
f　2　人
g　勤　務

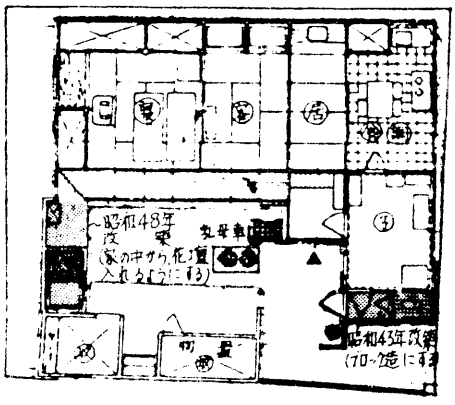
図3—12



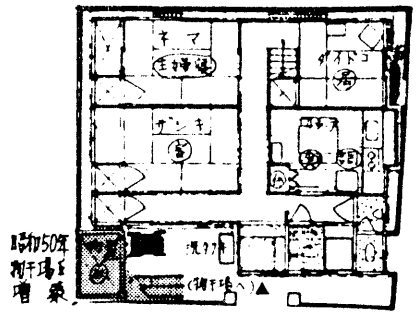
a 大正
b 108.00㎡
c 48.90㎡
d 70.48㎡
e 45.3 %
f 1 人
g 勤 務



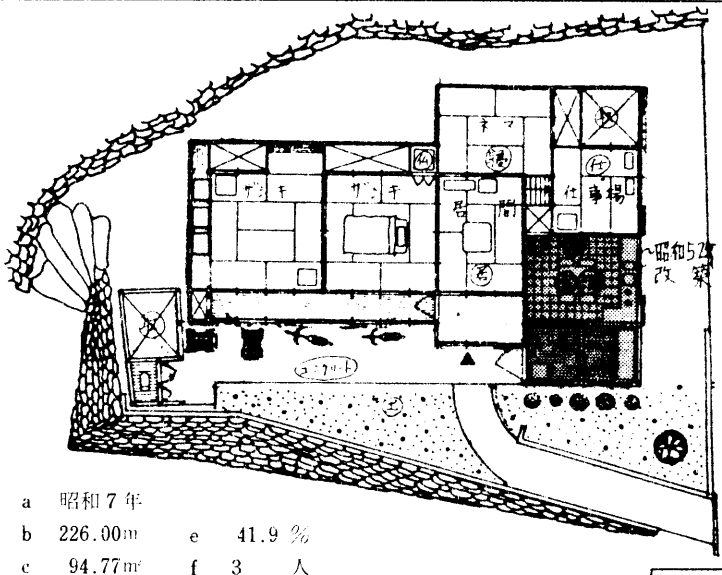
a 昭和40年
b 108.00㎡
c 67.55㎡
d 76.78㎡
e 62.5 %
f
g



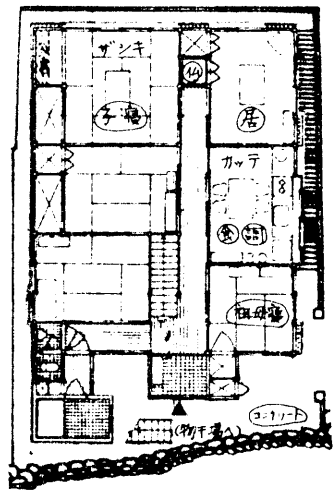
a 昭和3年
b 156.00㎡
c 76.02㎡
d 76.02㎡
e 48.7 %
f 4 人
g 勤 務



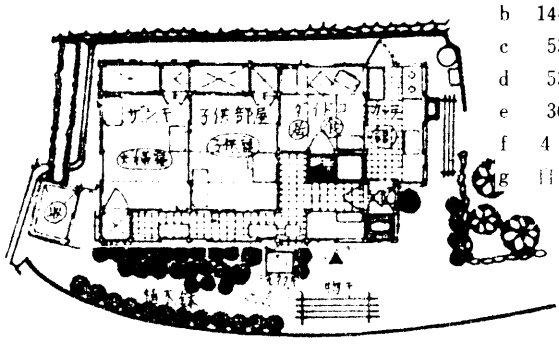
a 昭和43年
b 88.00㎡
c 62.25㎡
d 91.30㎡
e 70.70%
f 4 人
g 勤 務



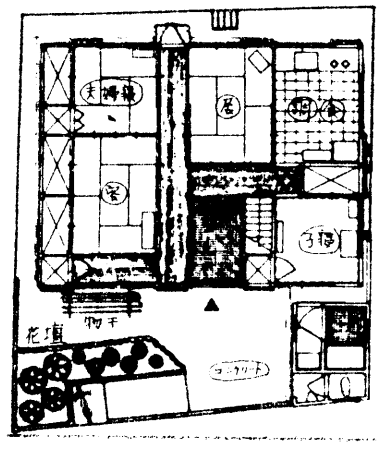
a 昭和7年
b 226.00㎡
c 94.77㎡
d 115.83㎡
e 41.9 %
f 3 人
g 自 営



a 昭和46年
b 131.20㎡
c 91.72㎡
d 136.54㎡
e 69.9 %
f 4 人
g 漁 業



a 昭和50年
b 144.00㎡
c 53.12㎡
d 53.12㎡
e 36.9 %
f 4 人
g 自 営



a 昭和47年
b 141.90㎡
c 73.04㎡
d 101.26㎡
e 51.5 %
f 5 人
g 漁 業

図3－13

○風呂を主屋とつなげ，便所は木造からブロック造へ
○玄関脇の収納スペースを子供部屋へ
〔増　築〕
○カッテ　○子供部屋　○客間　○２階　○別棟

広間型・広間変形型の建築年代は明治時代から昭和初期の平家である為，その後の生活様式・形態の変化に対応出来なくなり，それがカッテ・風呂・子供部屋に顕著に現われているといえる。並列型は戦後・中廊下型は昭和40年代以降が多く，増改築はあまりみられない。

(2) 住居の変化（建築年代と住居平面の変化）

1) 相賀浦は明治３年に全戸流失したためにそれ以前の住宅はほとんどない。明治時代（110～70年以前の住宅）は広間型と広間変形であり，並列型は大正時代（70年前）からつくられるようになった。中廊下型は昭和30年代の後半（伊勢湾台風以降）に多数たてられている。昭和40年代以降ではほとんど中廊下型と並列型である。中廊下型及び中廊下導入型は２階建が多く，延床面積が増大し個室化がはっきりしている。平屋建と２階建の延床面積からみたターニングポイントは80m²位でそれ以上は２階建である。

大正時代中期まではほとんど平屋建で，昭和初期に建築されたものに２階建が多い。又，昭和40年以降の住宅は中廊下型及び中廊下導入型で２階建の場合が多い。（図３－12）（図３－13）

〔広間型〕　平面構成は変化ないが，ネマ・ザシキの壁が昭和では襖になっており，玄関右脇の物置きが仕事部屋や風呂となる。

〔広間変形型〕　平面構成の大きな変化はなく，他の部分における変化は広間型同様である。

この２類型に共通して言えることは，生活様式・形態の変化にともなう改築により出来た平面がそのままその型の新しい住居平面となっている。

〔並列型〕　並列型は区画地が一杯になり，山側の細長い土地に建てられた家であり，広間型・広間変形型とは別に生じたものである。しかし，ザシキとネマ（次の間），ダイドコとカッテ等居室の連結状態は広間型と同じである。

〔中廊下型及び中廊下導入型〕　中廊下型は昭和40年以降主流をなし，特に広間型の後に建て替えられた二間続中廊下型が多い。

4. 千葉県勝山漁業集落

4－1　調査地及び調査対象

勝山漁業集落が属する鋸南町は，房総半島の南西部に位置し，北は富津市，東は鴨川市，南は富山町に接し，西は東京湾に臨んでいる。東西10.5km，南北7.3kmで海岸より三角状に山に囲まれ，北に標高329mの鋸山があり，海岸線中央部には県営勝山漁港及び国鉄安房勝山駅，北に保田漁港と保田駅，南には岩井袋漁港がある。

鋸南町の東半分は山間地，西半分は農地が展開し，海岸線は11.4kmで南房総国定公園に指定されており，夏期は海水浴客で賑う。農産物は花　，洋菜，柑橘類，海産物はサバ，サンマ，タイ，カツオ，ムツ等多種に渡る。

鋸南町の人口は約１万３千で，昭和30年より３千人以上の人口減になっているが，世帯数は漸増し，核家族化の傾向を示している。経済の高度成長期を通して漁業不振のため漁業従事者の海運業その他へ転職が多かったが，最近になってUターン現象が起こり，水揚高もややもち直している。一部で養殖漁業が営まれるようになっている他，夏期の民宿経営が地元経済の大きな支えになっている。

勝山漁業集落は，旧勝山藩の城下町である勝山地区と竜島，岩井袋，下佐久間等の旧村からなっており，漁業地域では農業は殆んど営まれていない。さらに，勝山地区は内宿，仁浜，町，田町の各区に分かれ，それぞれが又数部落からなり，それが更に10戸前後からなる組に分

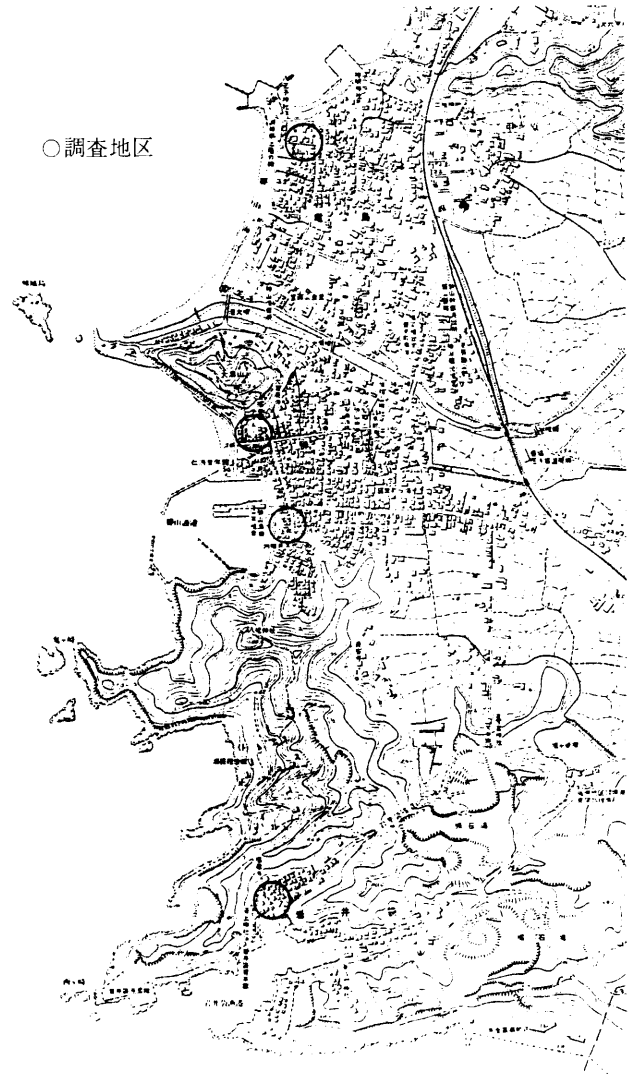


図４－１　勝山漁業集落

表４－１　調査対象地区の概要

	勝山漁業集落	内宿区	仁浜区	竜島区	岩井袋区
人口	6,183人	505	667	1,834	544
世帯数	1,462戸	114	168	462	141
漁業従事世帯数	294戸	66	86	43	75
漁家率	20%	58	51	9	53
集落数	25	3	4	11	2
組数	120	15	18	37	10
組平均世帯数	11戸	8	9	13	14
漁港規模	第二種	第二種		波止船溜り	第一種
漁業形態	漁船漁業	漁船漁業	漁船漁業	漁船漁業	漁船漁業
調査住戸数	73戸	25	19	10	19
抽出率	5%	22	11	2	13

かれるという重層的な構成をなす。勝山には江戸時代より捕鯨船団があり，漁船漁業の先進地として位置づけられる。

勝山駅から勝山漁港にかけて中心に商店街を有するDIDを形成しており，生活施設は一通り揃っているが，岩井袋は中心からやや離れており，交通の便が悪い。東京から特急で２時間とかからず，夏期を中心に多くの観光客が訪れるので，何かと都市の影響を受けやすいようである。

調査は，昭和50年に内宿，仁浜，竜島，岩井袋の各地区で行っており，54年に中でも最も居住密度の高い内宿，仁浜に重点をおいて再調査を行った。（図４－１）（表４－１）

４－２　住空間構成

(1)　敷地構成

勝山漁業集落の住宅地は概ね平坦地であるが，岩井袋地区はやや傾斜地になっている。一般に漁村集落の最も顕著な特性の一つとして，その高密度性があげられるが，勝山漁業集落において最も密度の高い内宿及び仁浜区はネットで65％程度である。個々の住戸の建蔽率は，敷地面積が明確でないものが多いのであまり正確に把握できないけれども，70～80％のものが多くを占める。表通りは３～４ｍの幅員があるが，そこから奥へ入り込む路地は１ｍ程度の幅しかない。庭のスペースは殆んどなく，敷地と敷地の境界も不明瞭で，塀をたてる例は少ないが，住戸と住戸の間は通路である他，住戸内からはみ出した家財道具や廃品，漁具の置場として使われており，又，外流しが多く設置されている。そこはそれぞれの住戸の所有に属しているのであるが，狭い空間を共用して有効に利用している。

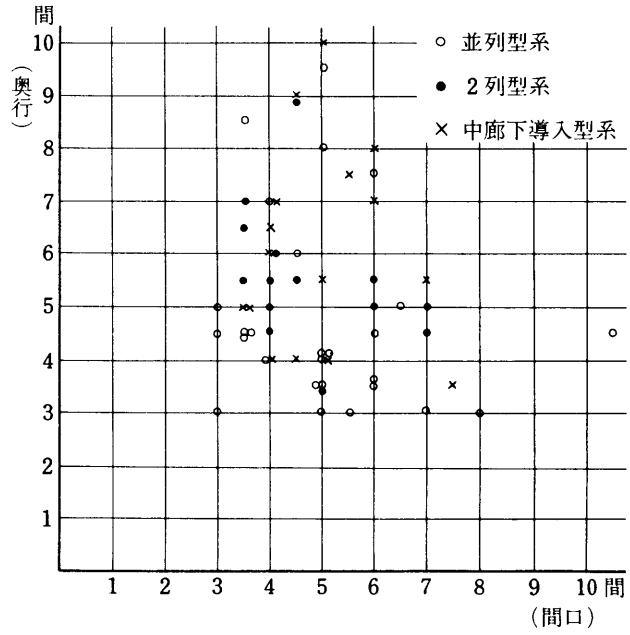


図４－２　敷地の間口と奥行

玄関の位置はほぼ敷地に対する道路の位置関係に規定されているが，東あるいは西に道のある場合，かぎの手に曲がって南から入るものが多く，結果的に南入りの比率が高い。

(2)　住宅平面構成

伊根における住居に比較して，勝山における住居の平面型は規則性が乏しい。ここでは，居室の並びに注目して，居室がほぼ１列に並ぶ並列型系，居室がほぼ２列になる２列型系，中廊下を導入した中廊下導入型系の３つの系に大きく分類した。いずれの型についても間口と奥行の比率関係は特に相関がみられないが，並列型系は間口，奥行きとも３間以上であり，他は３間半以上で奥行き４間以上が大部分である。

同じ型系列でも個々には大分異なった点がある。並列型系では，縁側があるものと，縁側がなくてへやが通り抜けになるもの，あるいは台所や他の居室がかぎの手に曲がった形態にあるものなどに分かれ，２列型系には，整型の田の字型，食い違い型，広間型などが含まれる。中廊下導入型の場合，田の字型や並列型を基本型として，そこに廊下を導入して動線やへやの分離を図ったものが多い。

又，便所，浴室，台所，仏壇等の位置は，殆んどの住居が家相のきまりに従って配置されている。

即ち，北東－南西の方向軸は汚してはならないものとされ，便所は北西，浴室は南東，台所は南東又は東，仏壇は北にあって南面するものが多くを占める。

(3)　住空間の規模構成

住宅の床面積は60㎡から110㎡までが多くて全体の

80%を占め，その間にほぼ均等に分布している。調査した中で最も小さいものは12m²の一室住居で老女が一人で暮らしている例であり，最も大きいものは176m²で民宿を営んでいる例である。居室数は1室から8室まであり，最も多いのは5室で全体の約1/3を占め，4室から6室までが8割を占めている。

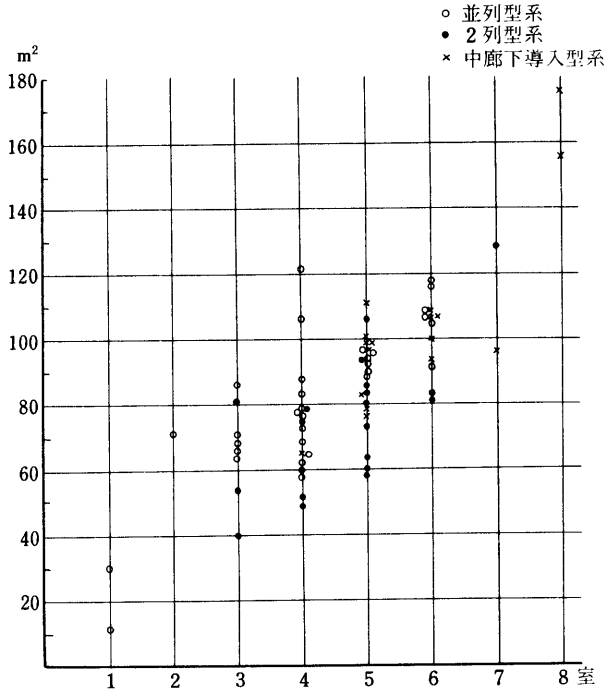


図4－3　住宅規模

家族1人当たりの居室数では，1.0未満のものが約1/3あり，全般的に狭い住居が多いと言える。

平面型別に床面積をみると，概して中廊下導入型系がやや大きく，最低で65m²，平均約100m²あるのに対し，1列型系は平均81m²，2列型系は平均75m²とやや小さい。（図4－3）

居室の広さは，いずれの型系においても一般に6帖が最も多く，8帖は少ない。

4－3　住生活様式

(1)　日常的生活

並列型系のうち，1階に居室が3室並んで入口が中央部に位置している場合，玄関に最も近い中央のへやは6帖が多く，ここは食事＋接客＋団らんの生活行為に多用されているが，就寝室としても使われている。そのとなりの台所に隣接するへやは4帖半が多く，主に食事＋接客＋団らんに使われ，反対側の奥まったへやは6帖又は8帖で専ら就寝室として使われている。

並列型系でも2室構成で端部に入口がある場合，入口に近いへやは6帖が多く，食事＋接客＋団らんのへやとして使われ，奥の方のへやは4帖半から8帖まで各種で，就寝室として使われている。

2列型系で居室3室の場合は，入口に近いへやは6帖が多く，やはり食事＋接客＋団らんのへやとして利用され，中間のへやは3帖あるいは4帖半で狭く，同様の使われ方が多い。奥のへやは就寝室として用いられる。

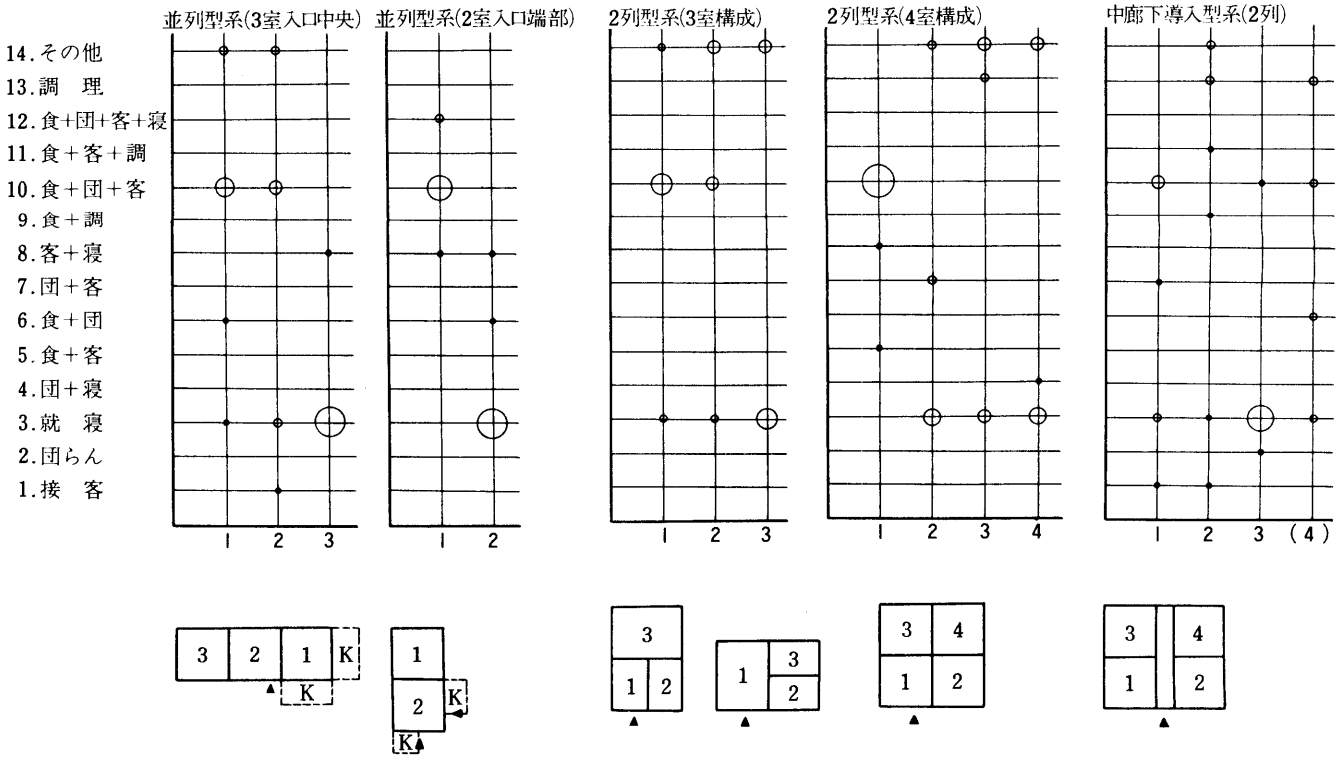


図4－4　へやの使われ方

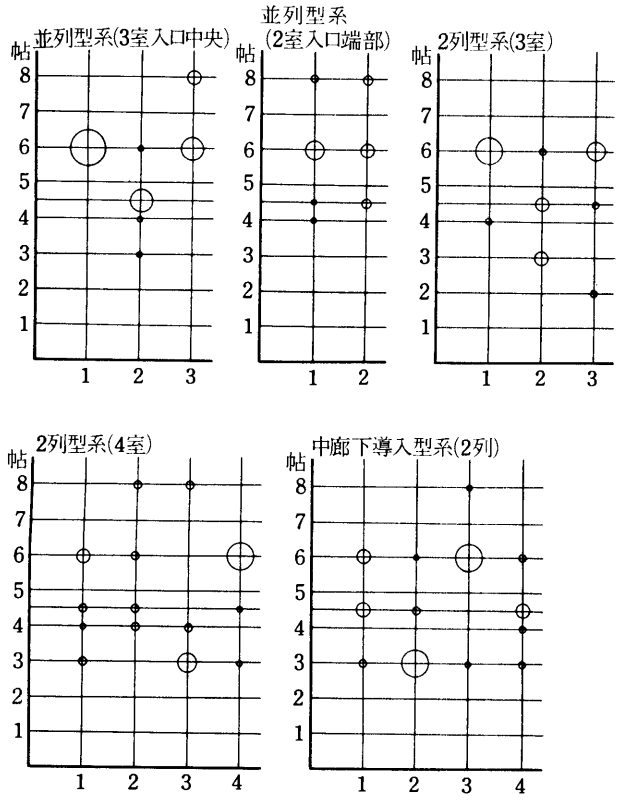


図4－5　へやの広さ

2列型系で，田の字型，食い違い型等4室構成の場合，入口に最も近いへやは3帖から6帖（6帖が多い）で，殆んど食事＋団らん＋接客の住行為に使われている。

中間のへやは3帖から8帖までいろいろであり，最も奥まったへやは6帖が主で，いずれも就寝・家事等に使われている。

2列型を原型とした中廊下導入型系の場合，入口に最も近いへやは4帖半あるいは6帖が多く，やはり食事＋団らん＋接客のへやとして使われ，次のへやは3帖，奥の方は6帖又は4帖半が多く，いずれも就寝，家事等に利用されている。（図4－4）（図4－5）

食寝分離，就寝分離は概ねなされているが，狭小な住まいで分離されていない場合もある。近年の2階化等による居室の増加により，2階は主に若夫婦や子供の層が使い，1階は年よりや親の層が就寝室として使うようになってきている。

これに対し，食事，団らん，接客等の生活行為は一つのへやで集中的に行われる傾向が強い。このことは，へや数の少ない住まいに限らず，へや数が充分にある住まいにおいてもほぼ同様であり，又，最近建てられる住まいの多くを占める中廊下導入型においても同様である。上述のように，この生活行為の重なりの多いへやは，外部から入りやすい入口附近及び台所に近い位置にあり，就寝のへやは入口から奥の方に位置している。

しかし，特に都市住宅的な中廊下タイプの住まい等において，食事・団らん等の家族の生活行為のへやと近所づきあい的な接客のへやを分離しようとする動きがいくつかの事例の中にみられ，こうした事は今後の住まい方，地域生活のあり方に於て問題を孕んでいると思われる。

一方，以前から高密度の地区が更に2階化されて日照条件が悪くなったため，2階にベランダを設けて洗濯物などを干す家が多いが，冬期など，そこでもなお日当たりが悪い場合は，海岸やお寺の境内などに設けた共同の物干し場を利用している。又，個々の敷地には駐車のスペースがないし，車では路地に入り込めず，自家用車はあまり普及していない。車の外来者があった時などは海岸の共有地等を駐車場として使っている。

海岸の一角や路地のそこここにはベンチがおいてあり，ふだん何かにつけ人々が集まってきては世間話などをしたりしている。

このように，この地区での海岸や寺，路地などの公共的あるいは半公共的空間は，高密度居住における不都合点を補うものとして重要な役割を果たしている。

又，建てこんでいることを個々の住民がよく認識し，夜はうるさくしないよう気をつけているということであるが，こうしたことは高密度居住地における地域での共同生活をスムースにしていく上で極めて大切なことであろう。ところが，夏期，民宿などの外来者が夜遅くまでマージャンなどして騒ぎ，附近の住民に迷惑をかけるという問題を生じている。

(2)　非日常的生活

勝山漁業集落には，部落，組という地域構成単位の他に，「近所」や「講」あるいは「おこもり」という地縁集団がある。

「近所」は，それぞれの家を中心にしてそののまわりの数軒がその家の近所として明確に決められているものである。部落や組のようにその所属範囲が境を接して区分けされるのではなく，「近所」のつながりは少しづつ位相がずれて鎖状につながっていく。この「近所」同志で，結婚式や節句の祝，葬式の手伝い，病気見舞などを相互に行なうのである。

「講」「おこもり」には稲荷講，初午，古峰講，えびす講などがあり，加入しているのは中年以上の人が多いが，家族によって参加するものが異なり，又，1人で複数の講に参加していることもある。稲荷講の場合，同じ部落内で10人前後のグループに分かれ，毎月あるいは数ヶ月に1回持ちまわりで参加者の住まいに集まったり，各部落にある稲荷堂に集まったりしている。本来宗教的な性格のものであるが，今では多分にリクレーション的な色あいを濃くし，皆で念仏を合唱した後，料理を食べたり，世間話をするなどで，ふだんから楽しみにしているようである。

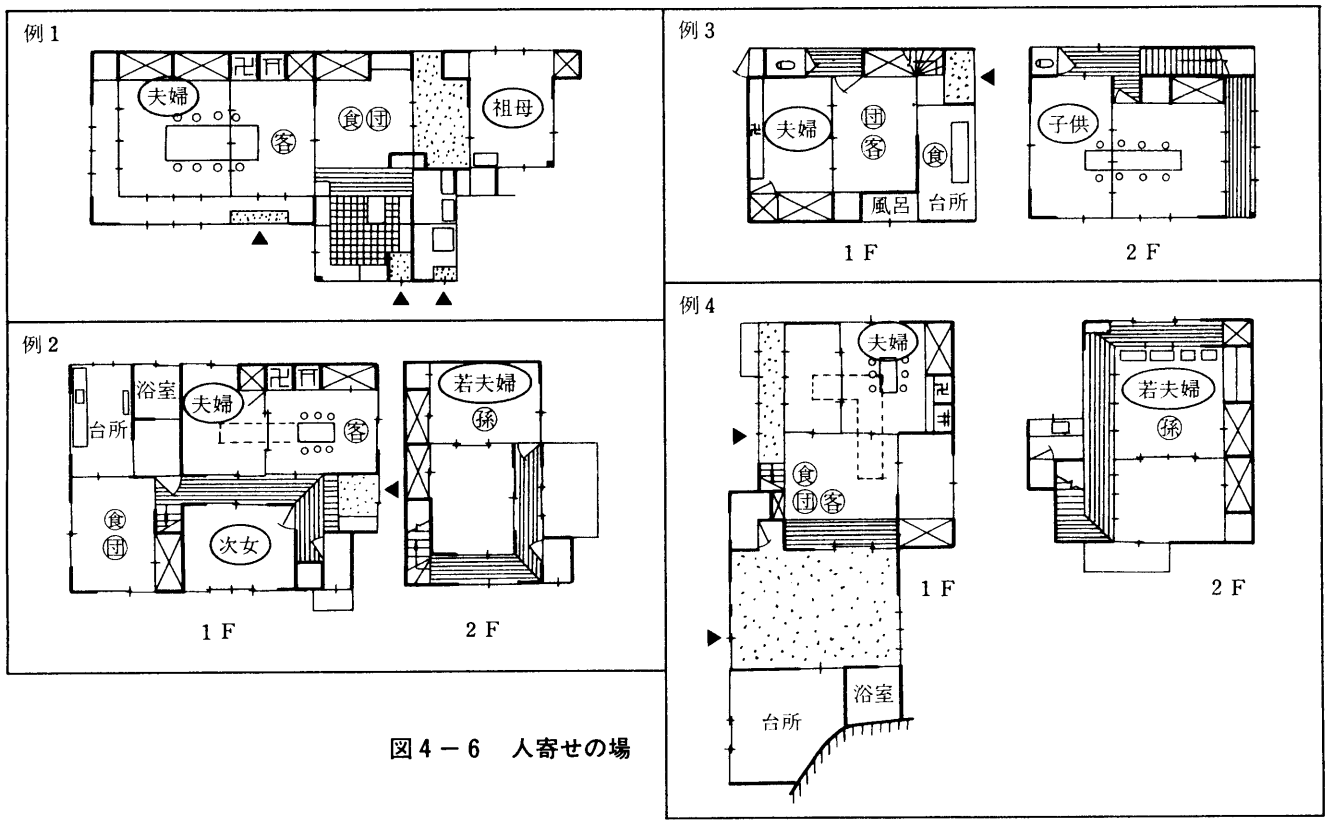


図4－6　人寄せの場

こうした集まりを住まい内で行う場合，少人数の場合は一室ですむが，多人数の時は続き間を連続して使う。家によっては2階の続き間を使用する例もある。このため，続き間は地域社会の構成員として伍していく上で必要不可欠の空間になっている。これらの続き間は住まいの規模がさ程大きくないので，ふだんは日常的住まい行為に使われている。（図4－6）

次に，最近目立って多くなった住まいの新築や増改築も，住生活の非日常性に係わることとみなせよう。その際，一般に都市においては便所や窓の位置等が相隣関係において問題となりやすいが，上述のようにこの地区では便所・台所・浴室等の位置が家相によって規定され，そのことは住民全体が承知しているので特に問題が起こることはない。結果的に家相が環境に関する近隣関係の調和剤になっているわけである。ただし，便所が隣家の台所や玄関の前に来てしまった場合などにはブロック等で目かくしをしており，地域生活を円滑にしていく上での住み手の配慮の重要性が窺われる。

窓の位置については，これ程建てこむと調整の余地がなくなるということもあろうが，窓ごしに隣りの人と話をする程近しい仲だから，別に気にもならないということであり，ここにも高密度居住における近隣関係の重要性が指摘できる。

又，非日常的事件としての地震や火災は，もし起これば この地区では大きな災害となり易いが，ふだんの火の用心，地震の際の避難等については常日頃気を使っているし，前述の古峰講は火伏の神に祈る集まりである。このように，非日常的な事に日ごろの生活が深く係わっているのであり，逆に，講などの非日常的な集まり，特に各自の住まいを開放しての相互の交流が，日常的な生活を円滑ならしめる上で大切な意義をもっていると思われる。

(3)　漁業生産と住生活

小型船をもつ自営漁民は，住まい内においても漁具の手入れ等の仕事に従事することが多い。その場所は，玄関先や廊下，へやの中（2階も含めて）などである。しかし，好天の時は浜や船の上などでも行う。新築に際して，特に漁網や釣具の手入れのためのへやを意図的に設けた例や釣具の手入れをするため縁側をやや広げたという例がある。

漁具等の収納は，敷地に余裕がある場合は敷地内に物置をつくってそこに入れておくこともあるが，たいていは海岸に倉庫をもっている場合が多い。家の中や住戸まわりにも漁網等がおかれていることが多く，押入れに入れたり，玄関やへやの中に積んであったりもする。

大型船主の場合，17人を備っている船主で，敷地内に漁具倉庫の付属した乗組員用の別棟をもっている例がみられる。（図4－7）

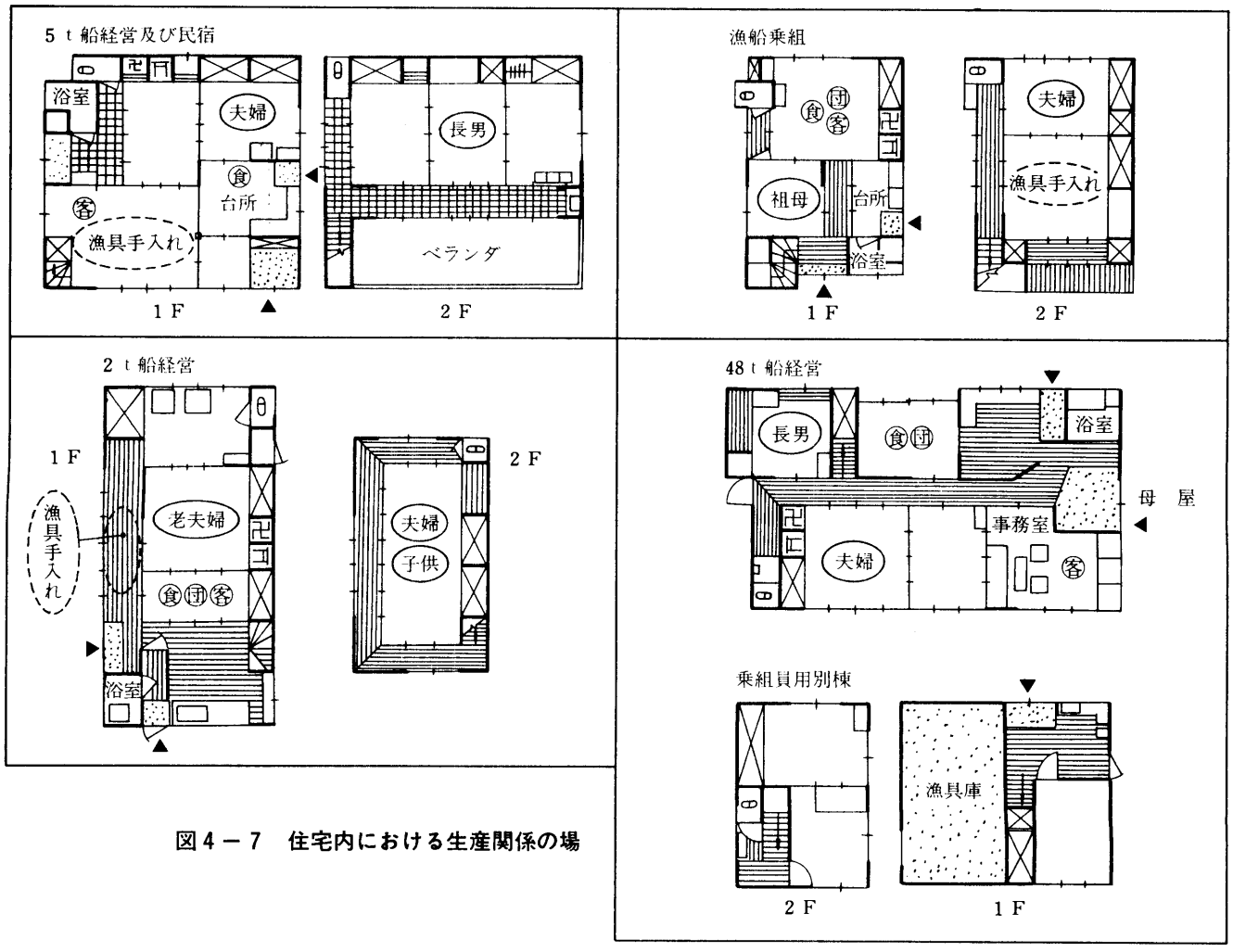


図4－7　住宅内における生産関係の場

4－4　住宅の変化過程

(1)　平 面 型

ⅰ　明治時代以前

明治時代以前の住居は並列型系又は2列型系で，その系統は今日までも続いている。最も古いものは，200年以上を経ているとのことであるが真偽は定かでない。古い住居は土間部分が広かったようであるが，その後床上げして台所や居室に転用したものが多い。2階は殆んどなく，あっても屋根裏程度であった。

ⅱ　大正時代～昭和前期（戦前）

基本的な間取り構成は明治以前と大差ないが，土間部分が小さくなるか，あるいは殆んどなくなり，2階建にするものが序々に増え始める。

ⅲ　昭和後期（戦後）

戦後，昭和30年頃から間取りの中に中廊下を導入するケースがあらわれてくる。しかし，この場合の中廊下は玄関から連続したものでなく，断片的にへやや動線の分離のためにとり入れたものが多い。中廊下の導入は，農村部に較べてかなり早い。

その後，昭和40年代に入って，平面型の変化はより顕著になる。中廊下が玄関からつながって居室部分と水まわりを各々にまとめこむような，都市住宅と変わらないタイプのものがつくられるようになった。又，新築のものは当初から殆んどが2階建で，平屋建の古い住居も2階を増築するものが多い。主に規模が小さくて中廊下を入れる余地の少ない場合など，並列型にするケースも多いが，この場合は古い並列型系と違って，玄関の部分に小さなホール状のスペースをとり，そこを基点として居室や階段，台所，浴室への動線を分割するという工夫がみられる。（図4－8）

しかし，いずれにせよ，殆んどの住まいが続き間をもち，間仕切は襖障子で，中廊下を入れたものでもそれが必ずしも一方的に個室分化を進めるものではないことに注意する必要がある。

(2)　住宅規模

住宅の床面積は近年になるに従って序々に増加しており，大正時代以前のものは平均70m²弱であるのに対し，最近10年間の平均は90m²強で，この50年程の間に約20m²増えたことになる。この傾向は並列型系，2列型系とも同様で，中廊下導入型系は最近建てられるようになったので今の所あまり変化がみられない。

従って居室数も漸増しており，大正以前の平均が3.8

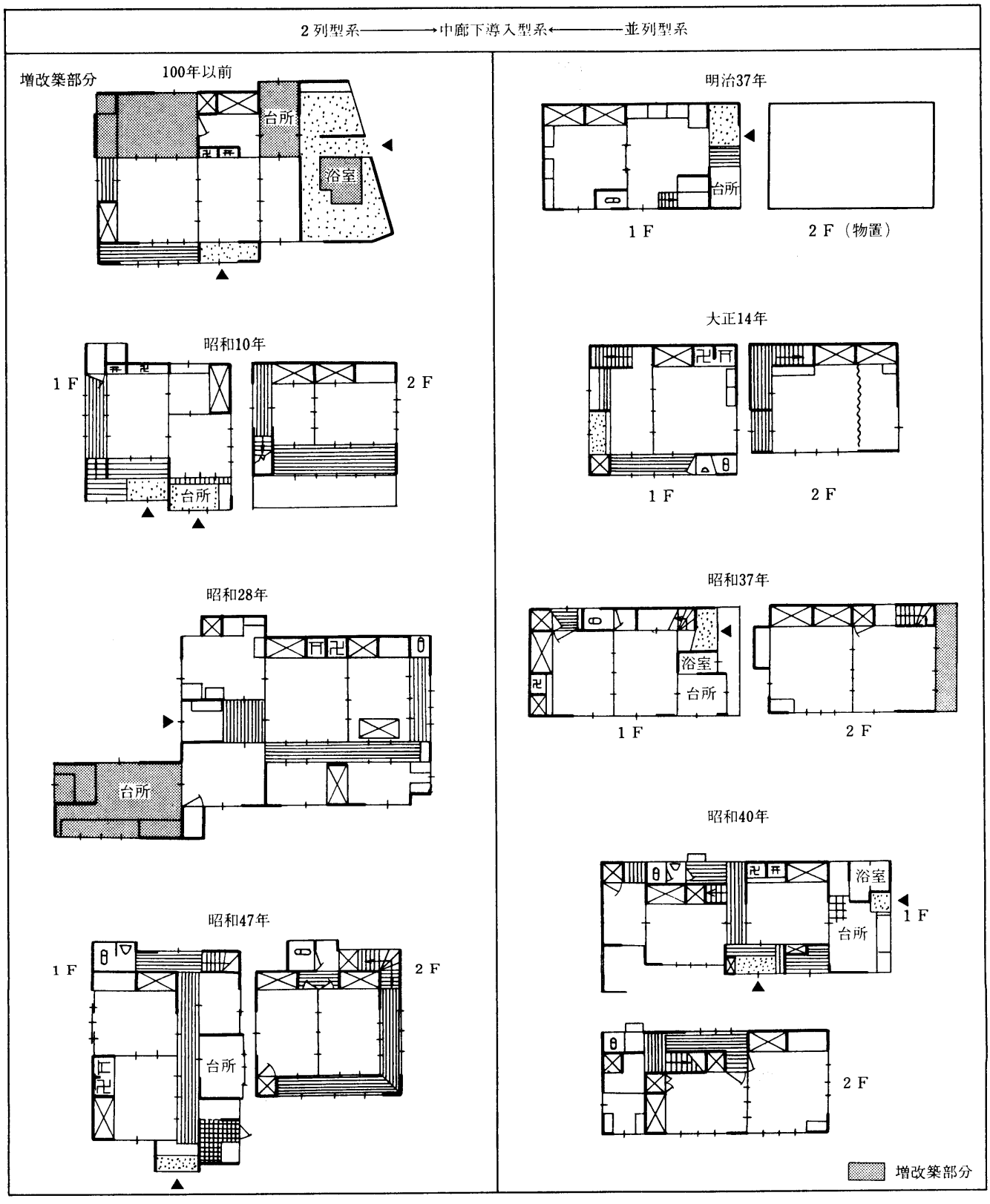


図4－8　住宅の変化過程

室であったのに対し，ここ10年間に新築のものは5.2室で1.4室の増加になっている。増改築によって室数の増加したものは以前3室以下であった場合が多く，特に2室以下だったものは殆んど室数が増えている。

居室の増築は2階化によるものが多く，このことは明治以前から建蔽率の変化は殆んどないのにもかかわらず容積率が増加していることからも窺うことができる。しかし，床面積の増加は住居内部の水準を高めることになったが，その反面，2階化によって日照・通風等の環境条件が悪くなるという問題を生じている。

増改築の経過はヒアリングでの把握のため，戦後のものしかはっきりしないが，設備面では，台所の改善，浴室の新設・改善が多い。

5. まとめ

本研究の目的である漁村住宅の住空間構成と住様式及び更新過程の一般性と特殊性解明の手がかりとして，本稿においては調査3集落の住空間構成と住様式及びそれらの変化過程の比較検討を行い，それらの共通性と差異について論じまとめとする。今年度の全調査集落と次年度の調査集落の結果より漁村住宅の住空間構成と住様式及びそれらの更新過程の一般性と特殊性を検討することとする。

(0) 背　景

3集落の背景はそれぞれ異なる。すなわち，京都府伊根集落は内湾立地狭後背地，列状中規模密住集落であり，漁業は組合経営巻網船団，大型定置網漁業を中心とした総合漁業であり，大型漁船漁業は発達していない。三重県相賀浦集落は湾口入江緩傾斜狭後背地，塊状格子状街区中規模密集集落で，津浪移転のため計画的に作られた集落であり，漁業は遠洋一本釣りの大型漁船漁業と真珠養殖を基幹とした複合漁業である。千葉県勝山集落は内湾築港，広後背地市街化密住大集落で旧城下町であり，漁業は大小漁船漁業を基幹に魚養殖，大型定置網漁業の総合漁業である。

共通することは第2種漁港で漁業が発達していること，密住集落であることである。他の条件は異なる。

(1) 住空間構成

伊根，勝山は密住のため屋敷構えはないが，計画的に作られた相賀浦では屋敷構えを持つ。漁業の発達した密住集落では屋敷構えを持つのは珍しい。勝山は階層間格差が有り大型漁船漁家は屋敷構えを持つ。住空間構成は3集落とも異なる。伊根は主屋一船屋の別敷地2棟構成，相賀浦は主屋一物置一外便所の3棟または主屋一物置の2棟構成であり，勝山は主屋だけの1棟構成である。最も密住の勝山は主屋以外の付属建物の建築は不可能で海岸や区の空地へ集中的に漁具庫を建築している。岩礁で急深海岸の伊根は船小屋が発達し，居住空間を持つ船屋となっている。

(2) 住宅規模

住宅規模は伊根が他の2地区より大きい。相賀浦及び勝山は60～150m²であるが，伊根は70～200m²である。格差の表われ方は伊根は平面型により異なり，これは新旧による差異と同じである。田の字型系住宅は大正以前の建物に多く規模が大であり，たて列型系は昭和以後に多く規模は若干小さい。旧い家は旧株持漁家，新しい家は分家または旧無株漁家といえる。一時代前の階層間格差である。勝山は現在の階層間格差で大型船主は大規模，小型船主は小規模住宅である。両地区とも生産手段の格差が住宅の格差を生じている。計画的に作られた相賀浦は宅地配分はくじ引で行っており，敷地条件の良い宅地に建てた家は大規模広間型，条件の悪い敷地に建てた家は小規模並列型である。計画的に作り，くじ引きで宅地配分したため漁業経営階層による格差ではない。

(3) 住宅平面構成

住宅平面構成（間取り型）は地域により異なり，また，それぞれの集落内では敷地形態により異なる。伊根は「田の字型系」と「たて列型系」の2タイプが大部分であり，相賀浦は広間型系，並列型系，中廊下導入型系の3タイプ，勝山は規則性は少ないが並列型系中廊下型系の2タイプが大部分であり，並列型に中廊下を持つ中廊下導入型も若干ある。

伊根の田の字型系とたて列型系の相異は敷地条件によるものである。間口が4間半以上の場合は田の字型系，それ以下の場合はたて列型系と分化している。計画的に作られた相賀浦では南面の間口の長さが確保されており奥行きで規定されている。奥行きが3間以下の場合は並列型系，3.5間以上の場合は広間型系と分化する。広間型系は4間付近に中廊下導入型と広間型，4.5間付近に変形広間型が集中する。勝山は敷地形状による明確な分化は見られないが，並列型は間口，奥行きとも3間以上であり，他の型は3間半以上で奥行き4間以上が大部分である。

歴史的変化は明確であり，伊根は田の字型は大正以前に多く，たて列型系は昭和以後に多い。相賀浦では明治から昭和初期までが広間型，並列型は昭和以後，中廊下導入型は昭和40年以後と分化している。昭和40年以後に中廊下導入型が多いのは住宅金融公庫等の強い指導である。勝山は中廊下導入型は昭和28年以後であり，その他は明治時代から今日まで続いている。

住宅平面型は敷地の形状により規定され，歴史的には共通の変化過程にあるといえよう。

(4) 日常的住生活

日常生活では1階が食事，団らん，接客等主として家族員共通の生活空間，2階は個室と個人生活空間に分化している点が共通している。しかし，1階の各室の使われ方は平面型により異なる。伊根の田の字型ではオモテ座敷2間は接客，客寄せ，奥土間側のナベザは家族員の生活，ナンドは老人または主人の寝室と形式化している。勝山及び相賀浦の並列型では続き間を除いた1室が団らん，食事等の家族員の生活空間である。全体的にはオモテ座敷または続き間は日常的には使わず，ナベザやカッテ等の1室を日常の食事，団らんに使用する生活様式である。ただし，田の字型系の表側ダイドコロ，並列型系の玄関側1室，広間型系のダイドコロ（広間）は日常的

接客空間としても使用し，ここに神棚はある。日常的生活様式は似ている。

表5－1　まとめ

特性＼集落		1. 京都府 伊根集落	2. 三重県 相賀浦集落	3. 千葉県 勝山集落
1	立地・地形	・内湾立地入江 ・崖下狭後背地 ・第2種漁港	・湾口入江 ・緩傾斜狭後背地 ・津浪移転集落 ・第2種漁港	・内湾築港 ・広後背地農地有 ・旧城下町 ・第2種漁港
2	集落形態	・列状中規模集落（人口1,654人） ・一様密住集落	・塊状格子状街区中規模（人口1,500人） ・密住集落	・市街化大集落（人口6,183） ・密住密度階層分化
3	漁業特性	・総合漁業 漁協大型定置網 漁協巻網船団 中小型船漁業	・複合漁業 遠洋一本釣 真珠・魚養殖	・総合漁業 大・小漁船漁業 養殖漁業 大型定置網
4	住空間構成	・屋敷構無し ・主屋－船屋2棟構成 船屋内浴室・便所	・屋敷構有 ・主屋－物置・外便所構成（広間型） ・主屋－物置構成（中廊下導入型）	・屋敷構無し ・階層間格差有 大型船－同一敷地内 小型船－共有地
5	住宅規模	・延床70～200 m² ・階層間格差小 ・新(小)－旧(大)間格差	・延床60～150 m² ・立地による格差有 ・漁業階層間格差小	・延床60～150 m² ・漁業経営階層間格差大
6	住宅平面構成(間取り型)	・2タイプ分化 田の字型系 たて列型系	・3タイプ分化 広間型系 並列型系 中廊下導入型系	・規則性小 並列型系 中廊下型系 中廊下導入型
7	密度特性	・建ぺい率50～95% ・平面型により差 たて列型系－小規模高密度 田の字型系－大規模中高密度	・平面型敷地面積と関係有 並列型－小規模高密度 広間型，中廊下導入型－中規模中密度	・60～90% ・漁業経営階層間格差有
8	日常的住生活	・田の字型生活 1階地域家族生活重視 ・たて列型生活	・家族・個人生活重視 1階地域社会，家族生活，2階個人生活	・並列型生活 続き間家族生活に利用 2階個人生活
9	非日常的住生活	・地域伝統生活 講，祭り 続き間客寄 （田の字型系） 一室客寄 （たて列型系）	・公共施設依存	・地域伝統生活 講，オコモリ 続き間客寄
10	漁業生産の住生活	・漁法により相異 船屋の高度利用 小型船漁業は生活空間と重複	・住宅内では行わない，生活と生産の分離 元集落(浜)で生産活動	・漁法により分化 小型船漁業は生活空間と重複
11	住空間の変化過程	・田の字型系→たて列型系へ ・2階建個室増加 ・土間消滅 ・伝統生活尊重個室化	・広間型→中廊下導入型へ ・2階建個室増加 ・土間消滅 ・伝統生活消滅個室化	・並列→中廊下導入型へ ・2階建個室増加 ・伝統生活尊重個室化

(5)　非日常的生活

非日常的生活としての客寄せ行事の「講」「オコモリ」は伊根と勝山で行っており，相賀浦では行われていない。客寄せ行事では伊根の田の字型系，勝山の全戸では2間続き室を使うが，伊根のたて列型系ではオモテ1室のみが大部分であり，田の字型系でオモテ1室のみの例もある。田の字型系では客寄せはザシキまたはザシキとダイドコロに固定している。大規模中廊下及び並列型では1階の2間続きに固定しているが，たて列型は1階1室を主として使い，小規模中廊下型では2階続き間であり形式化は余りされていない。

日常生活と非日常生活より住様式を考えると，全体的には1階は家族生活空間，及び田の字型や並列型，続き間を持つ住宅では地域社会生活空間，2階は個人生活空間である。ただし，たて列型や小規模中廊下型では余り固定的でないといえよう。そして，田の字型では社会生活空間に対し，個人生活空間が劣等であり，相賀浦の広間型ではすでに広間型接客は行われていないが，広間や他の接客座敷が広く取られている点などに矛盾を有している。

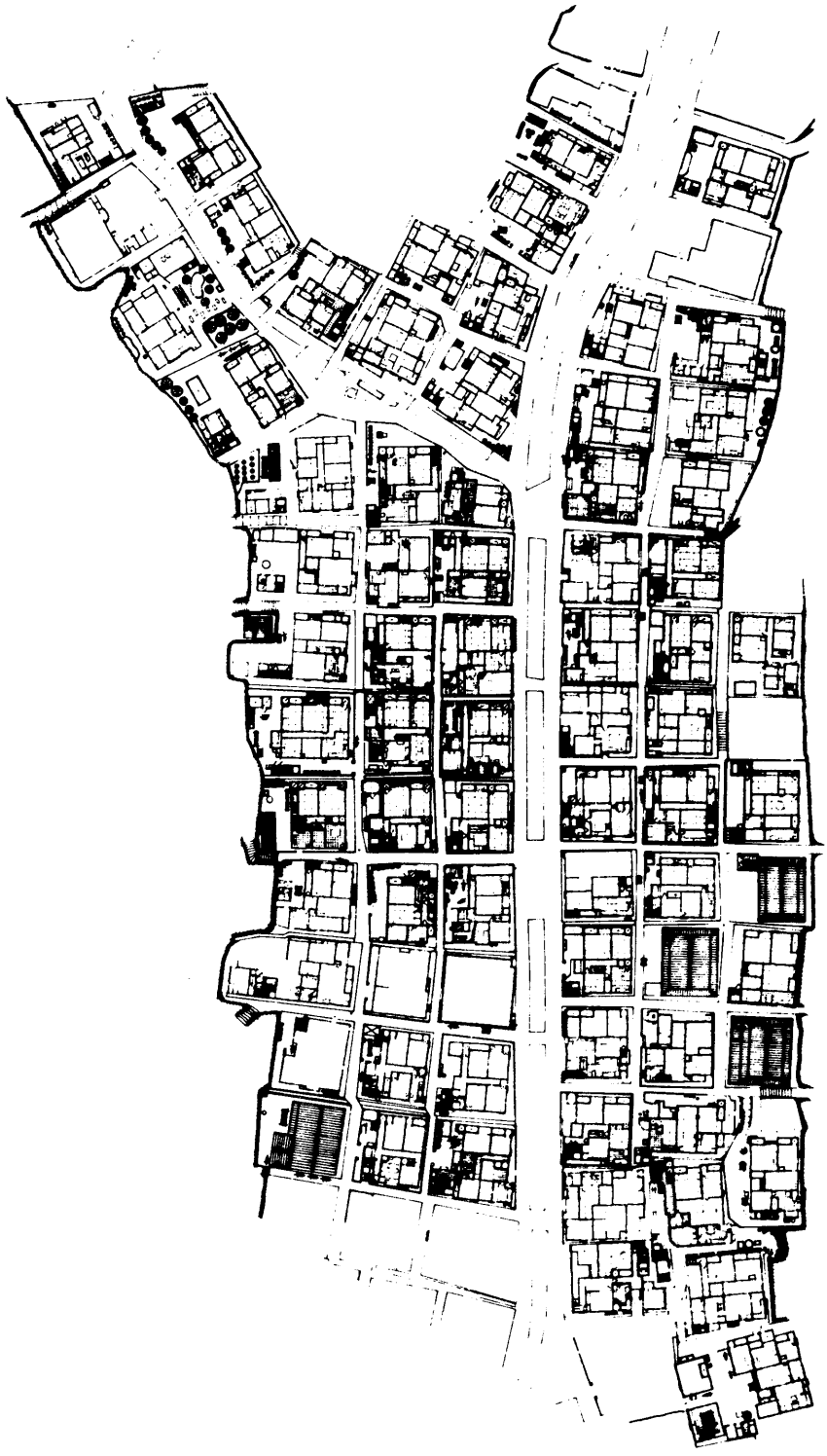
(6)　漁業生産の住生活

相賀浦は漁業生活行為は元集落の海岸近辺の漁具庫等で行われ，住宅内では行われていない。伊根及び勝山では階層により相異があり，大型漁船漁業では住宅内で行われることはほとんどない。逆に小型漁船漁業は住宅の玄関，座敷，縁側等で行われ生活と生産の場は重複している。養殖や中型漁船漁業はその中間で住宅の縁側や庭等でも若干漁具の手入れ等の補助的行為は行われる。

(7)　住空間の変化過程

住空間の変化過程は共通性が多い。3集落とも土間の消滅化，2階建て個室増加の方向に変化している。そして，相賀浦と勝山では広間型または並列型に中廊下を導入し室数を増す中廊下導入型に変化しつつある。また，伊根と勝山では非日常的生活空間としてのザシキや続き間などを存続させる伝統生活尊重個室化という変化過程である。個別的には伊根では土地事情より田の字型系からたて列型系へと変化している。また，伊根の個別性としては船屋という多目的空間が生産及び生活に高度に利用されて，充実化しつつある。

謝辞，本研究に取りかかるためには青木志郎東工大教授，鈴木成文東大教授，巽和夫京大教授にお世話になりました。研究方法等につきましては鈴木成文東大教授，持田照夫前工短大教授に丁重なご教示いただきました。また，当研究にご協力をいただいた多数の現地住民の方々，3大学学生の諸君にも，合わせてお礼を申しあげます。



付図　相賀浦住宅配置図